

教育関係共同利用拠点
Joint Educational Development Center

「大学教育イノベーション人材開発拠点」

“Innovation in Learning and Teaching at University”

令和3年度 事業報告書

Project Report 2021



TOHOKU
UNIVERSITY



INSTITUTE FOR EXCELLENCE IN HIGHER EDUCATION
TOHOKU UNIVERSITY

東北大学高度教養教育・学生支援機構
大学教育支援センター

Center for Professional Development(CPD)
Institute for Excellence in Higher Education(IEHE)
Tohoku University

目次

1	2021 年度教育関係共同利用拠点の概要	2
1.1	教育関係共同利用拠点の事業及び組織	2
1.2	拠点プログラムの概要	2
2	2021 年度拠点事業の報告	4
2.1	主な取組	4
2.2	主な成果	4
2.3	プログラムの開発・実施	5
2.3.1	大学変革リーダー育成プログラム(TLP)	5
2.3.2	大学教員準備プログラム(PFFP)・新任教員プログラム(NFP)	7
2.3.3	大学マネジメント開発プログラム(SDP)	10
2.3.4	専門教育指導力育成プログラム(DTP)	10
2.3.5	高等教育レポート	10
2.3.6	専門性開発セミナー(PD セミナー)	11
2.3.7	PDPonline(専門性開発プログラム動画配信サイト)	12
2.3.8	創造と変革を先導する産学循環型人材育成システム	13
3	メンバー	15
3.1	大学教育支援センター教員・支援スタッフ等	15
3.2	大学教育支援センター 共同利用運営委員会委員	16
4	資料	17
4.1	PD(専門性開発)分野一覧	17
4.2	PD セミナー分野別一覧	18
4.3	PD セミナー参加者アンケート結果	23
4.4	PDPonline (専門性開発プログラム動画配信サイト)一覧	34
4.5	プログラム修了者数(2010~2021 年度)	37
4.6	高等教育レポート	37
4.7	産学連携教育イノベーター育成プログラム 受講者・修了者	38

1 2021 年度教育関係共同利用拠点の概要

1.1 教育関係共同利用拠点の事業及び組織

東北大学高度教養教育・学生支援機構(以下、機構)は、2010年3月に文部科学省の教育関係共同利用拠点の認定を受けて以来、それを継続して現在に至っている。第1期(2010-2014年度)は、「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」として、海外の最先端プログラムの導入を基本に、①教員の能力の構造化とキャリア・ステージに対応したプログラムの開発・提供、②教職協働を進める職員開発、③教育改革を進める中核人材の育成、の3つのコンセプトに基づいて様々な取組を行った。その後、第2期(2015-2020年度)は、「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点—大学教員のキャリア成長を支える日本版 SoTL の開発」として引き続き活動した。そしてこの度、第3期(2021~2025年度)は、「大学教育イノベーション人材開発拠点」として新たな認定を受け、これまでの活動の継続とさらなる発展に努めることとなった。なお2019年からは文部科学省より「持続的な産学共同人材育成システム構築事業」が採択され、社会人の学び直しを含む質の高い実務家教員育成研修プログラムの提供も行っている。

大学教育支援センター(Center for Professional Development: CPD)は、こうした教育関係共同利用拠点としての役割を果たすために高度教養教育・学生支援機構内に設置された業務センターである。CPD では、当機構における先進的な取組と成果を学内外に発信することで、日本の高等教育の質向上に寄与するインターフェースの役割も担っている。

1.2 拠点プログラムの概要

当機構及び CPD は、第1期から第2期にかけて大学教職員の能力開発(FD・SD)事業を開発・発展させてきており、それは次の特色を有する。

第一に「国際性」である。米・カリフォルニア大学バークレー校、カナダ・クイーンズ大学、豪・メルボルン大学等との国際連携、及び米・スタンフォード大学、コーネル大学、英・インペリアルカレッジ、カナダ・ブリティッシュコロンビア大学等の専門家からの知見の提供を通して教職員能力開発プログラムを開発し、日本に適合するよう内製化に努めている。第二に「総合性」である。大学教育共通の普遍的課題に取り組む大学教育開発の総合的拠点として、個々の教職員の能力開発と共に、学部・研究科や全学的な課題解決を主導できる人材育成にも取り組んでいる。そして第三に「学問分野固有の専門性習得」である。重点領域として、学問分野固有の専門性習得に向けた教育研究「DBER」(Discipline-Based Education Research)に基づく「専門教育指導力育成プログラム」(DTP)の取組を推進した。加えて、2017年度に義務化された SD の趣旨を踏まえた「大学マネジメント力開発プログラム」(SDP)シリーズを開発・提供した。

以上のこれまでの特徴に加え、第3期では「オンライン化」に注力する。日本では1991年の大学設置基準の大綱化以来、「平成の大学改革」が進められてきた。そうしたなかで各種研修も広く全国で実施されるようになった。しかしながら新型コロナウイルス感染症は、これまでの大学・高等教育改革に資する各種研修のあり方について再考を迫ったといえる。第1期・第2期で実践した各種事業の方向性を踏襲しつつ、コロナ後の新たな大学像・高等教育像を見据えて、各種研修のオンライン化を試みることで、教育関係共同利用拠点としての役割を果たしたいと考えている。

2 2021 年度拠点事業の報告

2.1 主な取組

2021 年度は「大学教育イノベーション人材開発拠点」の初年度として、以下の拠点事業に取り組んだ。

- 教職員の専門性として必要な「高等教育のリテラシー」「専門教育での指導力」「学生支援力」「マネジメント力」の4領域ごとの専門性開発(PD)セミナーの開発・提供と専門性開発プログラム PDPonline の動画コンテンツの拡充
- 従来のプログラムについて、コロナ禍での効果的かつ効率的な実施を検討。大学教員準備プログラム(PFFP)の試験的な実施と、次年度に向けた新任教員プログラムの総合的検討
- コロナ禍により長期履修制度を採用していた大学変革リーダー育成プログラム(TLP)の実施
- 教育研究と大学運営の高度化を担う教職員を対象とする大学マネジメント開発プログラムの実施
- 文部科学省「持続的な産学共同人材育成システム構築事業」(2019-2023 年度)における「創造と変革を先導する産学循環型人材育成システム」の運営拠点及び中核拠点としての取組の実施

2.2 主な成果

本拠点における各種プログラムでは、評価指標を設定し、参加者数や参加者による評価(満足度等)及びプログラムの事後効果等に関する評価を行っている。また、学内外のメンバーから構成される共同利用運営委員会を設置しており、毎年、拠点事業に関する総合的レビューを行い、その結果に基づいて改善を図っている。本拠点の取組に対する全国の大学関係者のアクセシビリティを高めるべく実施した主な事項とその成果を以下に示す。なお、本拠点における各プログラム開発等は、先駆的な取組として文部科学省からも高く評価されている。

- ① 教職員の専門性として必要な「高等教育のリテラシー」「専門教育での指導力」「学生支援力」「マネジメント力」の4領域ごとの専門性開発(PD)セミナーの開発・提供と専門性開発プログラム PDPonline の動画コンテンツを整理・拡充した。
- ② PD セミナーに全国各地(46 都道府県)の多様な大学等(530 機関)から延べ 2,488 名の参加があり、参加者の満足度も 3.5(4 件法)とポジティブな評価が得られており、本拠点の取組は全国の大学教職員の専門性の向上に貢献していると評価できる。
- ③ オンラインと対面とを組み合わせた新しい大学教員準備プログラムを試験的に実施した。実施期間を従来から大幅に短縮して年2回実施し、過去最多の 35 名が修了した。
- ④ コロナ禍で長期履修制度を採用していた履修証明プログラム「大学変革リーダー育成プログラム(TLP)」を開発・実施し、受講生 4 名がプログラムを修了した。また今後の TLP のあり方に関する検討を行った。
- ⑤ 「大学マネジメント力開発プログラム(SDP)」において、教育研究と大学運営の高度化に必要とされる重要テーマ(2021 年度は「大学等の連携・統合)」についてセミナーを実施した。
- ⑥ 履修証明プログラム「産学連携教育イノベーター育成プログラム(AIBET)」の第二期プログラム(2021 年度)を実施し、97 名が修了した(参考:第一期修了者は 48 名)。

2.3 プログラムの開発・実施

2.3.1 大学変革リーダー育成プログラム(TLP)

Transformational Leadership Program in Higher Education

TLP は、グローバル化や少子化を背景に急速に変化する高等教育環境に対応し、新たなビジョンの構想や改革案の策定・実行を主導していくことのできる「大学変革リーダー」の育成を目的とした履修証明プログラム(1年半・180時間の学習)である。本プログラムは、文部科学省・職業実践力育成プログラム(BP)の認定、厚生労働省・教育訓練給付金制度対象講座としての指定を受けている。本プログラム修了者には、学校教育法第105条に基づく「履修証明書」(Certificate)が授与される。

①プログラムの目的・趣旨

TLP は、所属機関における改革案の策定・実行を含む実践的カリキュラムにより、大学のガバナンス・マネジメントにおいてリーダーシップを発揮できる人材の育成を目指している。

セミナーやワークショップ(eラーニングを含む)を通して高等教育に関する幅広い専門知識や技能を体系的に習得しながら、実際の機関運営や教育活動の改善・改革に先駆的に取り組む国内・海外大学での現地調査を行って体験的に学ぶ。受講者は、こうして習得した知識やスキルを駆使しつつ、所属機関における「改革案」を策定・実行し(プレゼンテーション)、高等教育に精通した経験豊かなアドバイザーによる助言・支援(コンサルテーション)も受けながら、実践力を獲得する。

TLPの到達目標は以下の通りである。

【プログラムの到達目標】

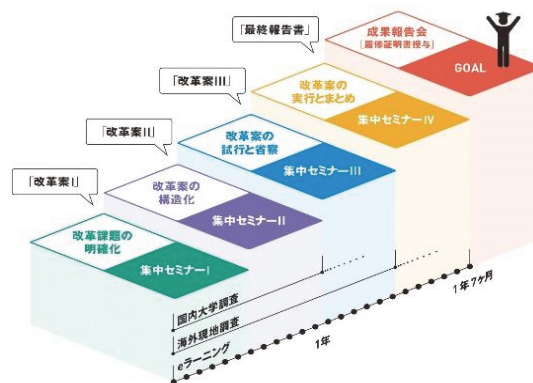
1. 高等教育に関する幅広い知識と最先端の動向を理解する【専門的知識・理解】
2. 具体的・現実的な課題を把握し、背景にある要因を分析し、構造化する【課題発見・分析力】
3. 課題解決に向けて、組織に主体的に働きかける実行力を身に付ける【実行力】
4. 分析内容や自分の考えなどについて、口頭および筆記にて論理的に表現する【論理的表現力】

②新型コロナウイルス感染症への対応:長期履修

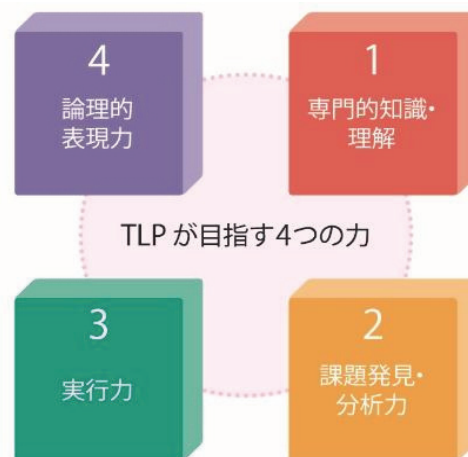
『令和2年度事業報告書』に記載のとおり、2019年から開始したTLPは、新型コロナウイルス感染症への対応から履修期間を半年間延長した(長期履修制度の採用)。それによりTLP(2019-2021)となり、成果報告書に基づきプログラムで得た学びを披露する成果報



TLPの5つの特徴



TLP学びの流れ



TLPが目指す4つの力

TLP4つの到達目標

告会を、2021年9月に開催した。

③実施内容

日時	プログラム	内容
2021年9月25日(土) 13:00~15:50	成果報告会 (オンライン開催)	・TLP(2019-2021)の集大成として、受講者が作成した成果報告書に基づき、これまでの活動概要、改革案の進捗状況や、成果などを報告する。 ・受講者の発表を受けてアドバイザー他とディスカッションを行って、プログラムで身につけた学びを学術的及び実践的視座から検討・共有する。

④受講者数

4 大学 4 名(2021年9月時点)

受講者属性:職員4名

⑤受講者評価

新型コロナウイルス感染症により当初の受講期間を半年間延長した TLP(2019-2021)であったが、受講者の努力により4名の受講者が無事プログラムを修了した。受講者からは本プログラムでの学びについて総じて肯定的な評価を得ることができた。

⑥今後の課題

新型コロナウイルス感染症の影響は少なくないが、それを差し引いてもなおいくつかの課題が顕在化した。1つは約2年間という比較的長期の履修期間をかけて、受講者の所属大学にて実現可能な改革案を錬成するという本プログラムの設計の根幹についてである。もう1つは受講者の学びをサポートする運営体制の構築である。これらの課題の詳細については、『東北大学履修証明プログラム 大学変革リーダー育成プログラム(TLP)2019-2021 年度報告書』で簡潔に記したので、そちらをご覧ください。

2.3.2 大学教員準備プログラム(PFFP)・新任教員プログラム(NFP)

Preparing Future Faculty Program / New Faculty Program

PFFP は大学院博士課程の院生やポスドク等、NFP は新任教員を対象に、大学教員としての能力開発に資する研修を提供するプログラムである。

前年度の事業報告書で記したように、2020 年度は担当教員の異動(2 名)及び新型コロナウイルス感染症の影響により、PFFP/NFP とともに実施を断念した。そして 2021 年度からの再開に向けて、①PFFP と NFP とを分離して実施することを目指し、まず PFFP を優先して実施する、②従来の9ヶ月間のプログラムからクォーター形式での実施などプログラム期間の短縮化を図り、効率的・効果的なプログラムへと改編するとして準備を進めた。以上を経て、2021 年度は PFFP の実施を優先し、第1学期と第2学期とで計2回実施した。

①実施内容

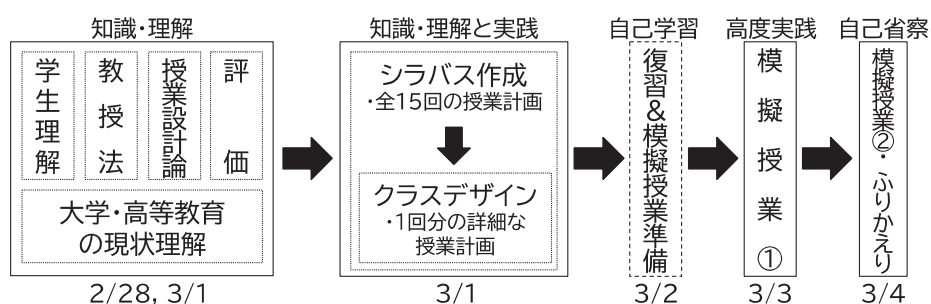
日本の大学・高等教育機関で教員を目指す本学大学院学生が、現代日本の大学教育・高等教育で求められる基礎的知識を習得し、自分自身で授業を分析・設計・開発・実施・評価する自己省察力を身につけることを目的とする。第1 学期はクォーター形式で実施し(8 週間)、第2 学期は集中講義形式で実施した。両学期で実施した内容の概要は以下のとおり。

2021 年度第1 回 東北大学大学教員準備プログラムの概要

	日時	実施形態	研修内容
第1回	2021 年 6 月 15 日(火)	オンライン	■オリエンテーション ■大学の歴史と現代高等教育 講師:戸村 理
第2回	2021 年 6 月 22 日(火)	オンライン	■学生理解 講師:小島 奈々恵、渡部 留美
第3回	2021 年 6 月 29 日(火)	オンライン	■学習の理論とデザイン 講師:佐藤 智子
第4回	2021 年 7 月 6 日(火)	オンライン	■大学教員とマネジメント 講師:福留 東土(東京大学大学院教育学研究科) 講師:野地 智法(東北大学大学院農学研究科) ■動画作成の説明 講師:戸村 理
第5回	2021 年 7 月 13 日(火)	オンライン	■授業デザインとシラバス作成 講師:串本 剛
第6回	2021 年 7 月 20 日(火)	オンライン	■模擬授業①(作成動画の検討) ■授業デザイン 講師:戸村 理
第7回	2021 年 7 月 27 日(火)	対 面	■模擬授業②(対面授業の実施・検討) ■授業デザインの改善 講師:戸村 理
第8回	2021 年 8 月 3 日(火)	対 面	■大学教員としてのキャリア検討 ■修了認定証交付式 講師:戸村 理

2021 年度第2回 東北大学大学教員準備プログラムの概要

日時	研修内容	
	午前(10:00~12:00)	午後(13:00~17:00)
1日目【オンライン】 2022年2月28日(月)	イントロダクション 大学・高等教育の現在	学生理解・教授法 授業設計論・評価①
2日目【オンライン】 2022年3月1日(火)	評価②(ルーブリックの作成)	シラバス作成 クラスデザイン作成
自学自習日	シラバス及びクラスデザインの作成、模擬授業の準備	
3日目【対面】 2022年3月3日(木)	シラバス・クラスデザインの共有及び検討	模擬授業①
4日目【対面】 2022年3月4日(金)	模擬授業②	ふりかえりとまとめ 修了認定書交付式



2021 年度第 2 回 東北大学大学教員準備プログラムの全体像

②参加者数

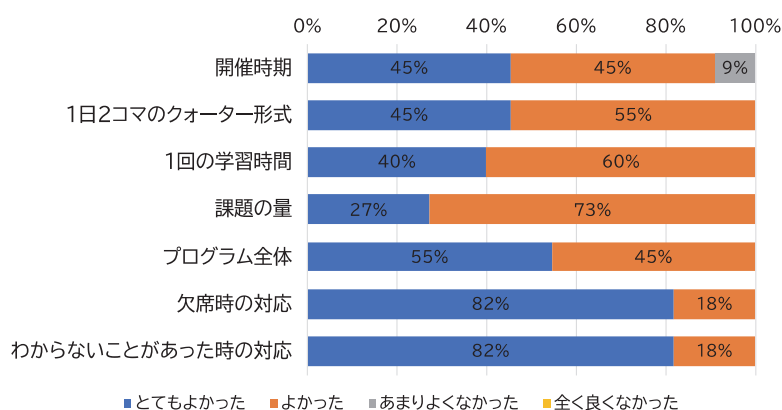
東北大学に在籍する博士課程後期学生を対象に実施

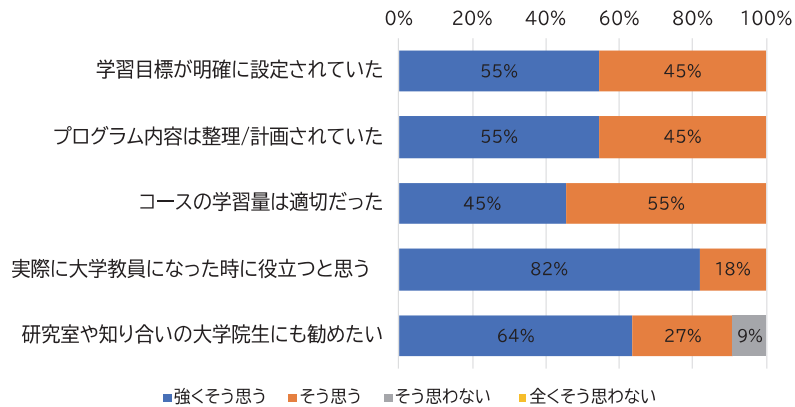
第1学期 9 研究科から 15 名参加し、12 名修了

第2学期 13 研究科から 25 名参加し、23 名修了

③受講者評価

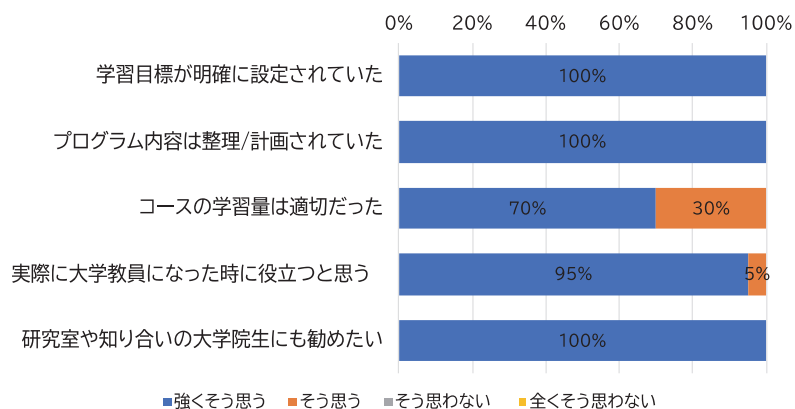
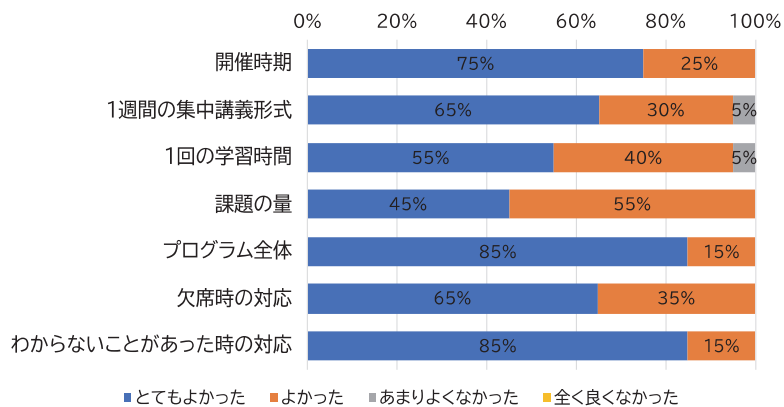
2021 年度第 1 回目の受講者アンケート結果





東北大学 大学教員準備プログラム(PFFP)の受講者評価
 (上:プログラムの形式について/下:プログラム内容について)
 ※回答者数 11 名(「1 回の学習時間」のみ 10 名)

2021 年度第 2 回目の受講者アンケート結果



東北大学 大学教員準備プログラム(PFFP)の受講者評価
 (上:プログラムの形式について/下:プログラム内容について)
 ※回答者数 20 名(「欠席時の対応」のみ 17 名)

2.3.3 大学マネジメント開発プログラム(SDP)

Staff Development Program

本プログラムは、職員に加えて教員や大学執行部も対象とする新たな「SD」の義務化を踏まえ、教育研究や大学運営の高度化の担い手を育成することを目指すプログラムである。上記SDの趣旨の下、大学執行部・教員・職員に共通に必要とされる重要テーマを取り上げるSDPシリーズを実施している。

①実施内容

2021年度は、「大学マネジメント開発プログラム」(SDP)シリーズとして、第1回「大学等の連携・統合」(2021年7月31日)を開催した。

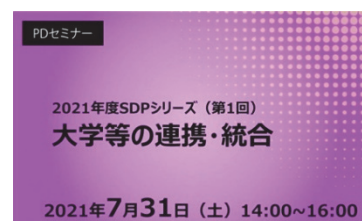
日時	内容
2021年7月31日(土)	2021年度SDPシリーズ(第1回) 大学等の連携・統合

②参加者数

全国32都道府県、計106機関から、121名参加。

③受講者評価

満足度:3.4(4件法)

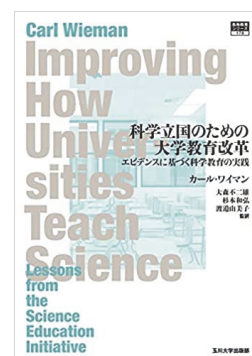


2.3.4 専門教育指導力育成プログラム(DTP)

Discipline-Specific Program

専門教育指導力育成プログラムで(DTP)では、学問分野固有の専門性習得に向けた研究「DBER」(Discipline-Based Education Research)に基づく専門教育指導力育成プログラムの取組を進めている。今年度は前年度からの取組みを継続し、STEM(科学・技術・工学・数学)分野における学問分野固有の専門性の習得に向けた「分野別教育方法研究」(DBER: Discipline-Based Education Research)の発展及びその実践的・実証的知見に基づく組織的な教育改革を主導してきたカール・ワイマン氏(スタンフォード大学教授。2001年ノーベル物理学賞受賞者)による、先進的・組織的取組の全貌を詳述した著書『Improving How Universities Teach Science: Lessons from the Science Education Initiative』の翻訳作業を進めた。

令和3年7月に『科学立国のための大学教育改革—エビデンスに基づく科学教育の実践』(大森不二雄他監訳)を玉川大学出版部より出版した。



2.3.5 高等教育レポート

Higher Education Report

高等教育の世界的動向を把握することを目的に、「コロナ禍での大学教育及び経済支援」をテーマに、共同研究員である王帥東京大学准教授には中国の、黄文哲三重大学講師には台湾のそれについてご報告いただいた。レポートは大学教育支援センターウェブサイト公表することで、簡易なアクセスを実現した。

2.3.6 専門性開発セミナー(PD セミナー)

Professional Development Seminar

第1期以来、日本の高等教育の多様性に対応すべく、大学教職員の専門性開発に必要な4領域「高等教育のリテラシー」「専門教育での指導力」「学生支援力」「マネジメント力」を設定し、キャリア別プログラムにおいて開発されたセミナーやワークショップを含め、専門性開発(Professional Development: PD)のための各種PDセミナーを企画・提供している。

①実施内容

本拠点では、国内外の高等教育における先端的な課題を取り上げ、高等教育の多様な領域をカバーするとともに、当該領域の第一人者によるセミナーを提供することで、セミナー参加者の能力開発に貢献している。前年度同様、2021年度もオンラインで実施・提供した。これにより広く全国から参加者を集めることができた。セミナーの詳細は、『資料編』を参照されたい。

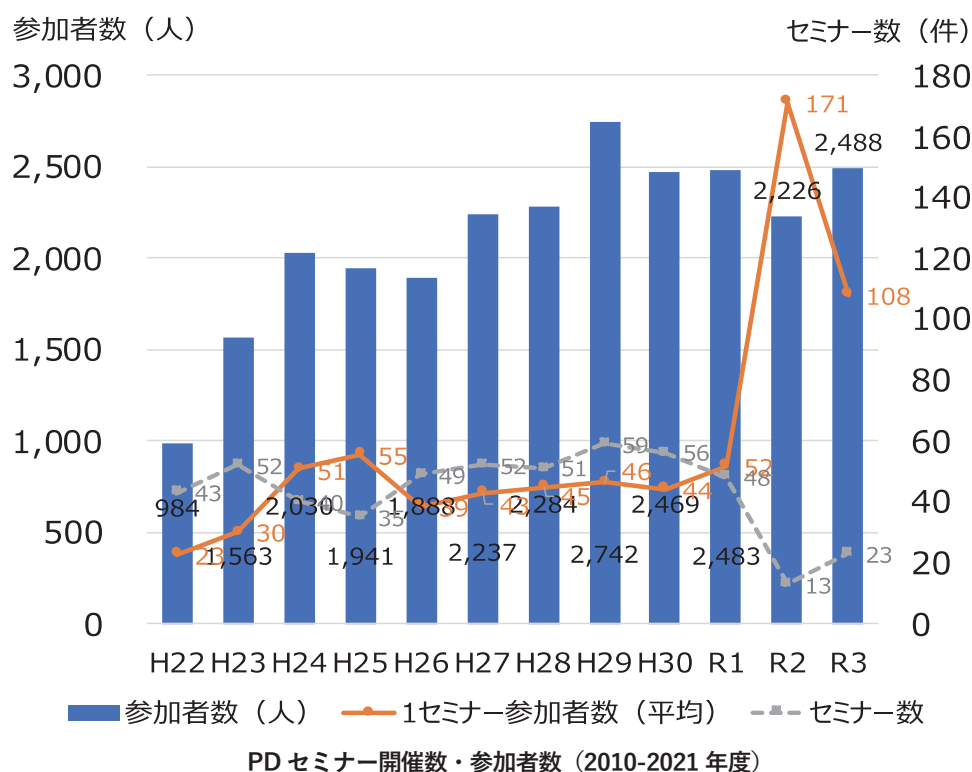
②参加者数

全国46都道府県、計530機関から、延べ2,488名参加。

③受講者評価

満足度:平均3.4(4件法)

総じて高い水準にあり、高等教育の多様な領域をカバーすることで、新型コロナウイルス感染症拡大のなかであっても、セミナー参加者の能力開発に貢献した。



2.3.7 PDPonline(専門性開発プログラム動画配信サイト) Professional Development Program-online

実施した PD セミナーの一部を厳選して動画化し、PDPonline として自由に視聴できる e-learning 教材を提供している。利用は無料。個人では登録不要で利用が可能である。機関単位で利用する場合は、機関利用申請を行えば、各大学の FD・SD 研修等に利用することも可能である。

①実施内容

PDPonline は、PD セミナーの一部を厳選して動画化し、オンライン上で広く公開することで、全国の大学教職員の専門性向上を支援することを目的として、逐次、研修コンテンツを拡充してきた。各動画はトピックの内容ごとにチャプターとして分割し、10~15 分前後の動画として順を追って再生できるように編集している。

②利用者数等

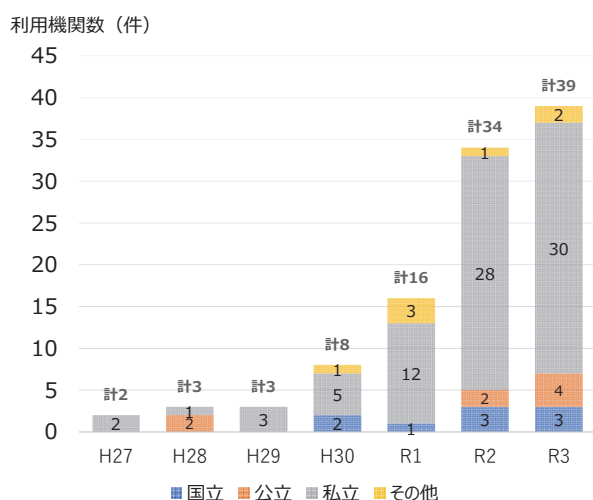
2021 年度末時点で計 90 件の動画が配信されている。2021 年度の動画閲覧回数は 34,488 件であり、解析開始時の 2014 年度の提供開始時から 2021 年度末までの累計閲覧回数は約 19 万件にまで到達した。

これらの動画コンテンツは、個人が自由に視聴できるだけでなく機関単位での利用にも供しており、大規模大学から中小規模大学まで、大学の FD 研修等において活用することが可能である。機関利用数は 2021 年度末の時点で 39 機関であり、その内訳は国立大学 3、公立大学 4、私立大学 30、民間組織 2 であって、対前年度 5 機関増となった。

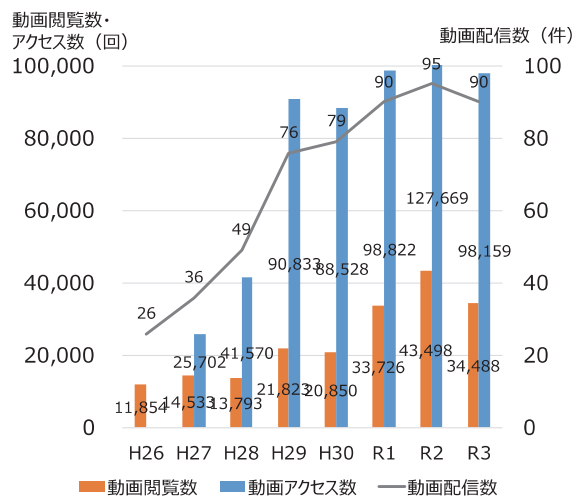
各機関では新型コロナウイルス感染症の影響により、対面での能力開発を行うことが困難となっている。PDPonline は遠隔による能力開発の機会を広く日本全国に提供するものであり、質的にも量的にも国内で類を見ない規模のコンテンツとなっている。



PDPonline ウェブサイト



PDP オンラインの利用機関数(設置形態別)



PDP オンラインの動画閲覧数・動画配信数

2.3.8 創造と変革を先導する産学循環型人材育成システム

文部科学省の「持続的な産学共同人材育成システム構築事業」(2019年度-2023年度)において、東北大学を代表校とし、熊本大学、大阪府立大学、立教大学の計4大学が連携して実施する取組「創造と変革を先導する産学循環型人材育成システム」が、運営拠点及び中核拠点として採択された。本取組では、産学が連携して実践的かつ広く深い学びを追求し、学生も社会人も学び続けチャレンジし続ける社会の実現、未来を拓く人材の各界への輩出のため、その中心的役割を担う実務家教員を育成する研修プログラムを提供するとともに、研修を修了した人材の活用を推進する。

①履修証明プログラム「産学連携教育イノベーター育成プログラム(AIBET)」

(1)第一期プログラム(2020~21年度)

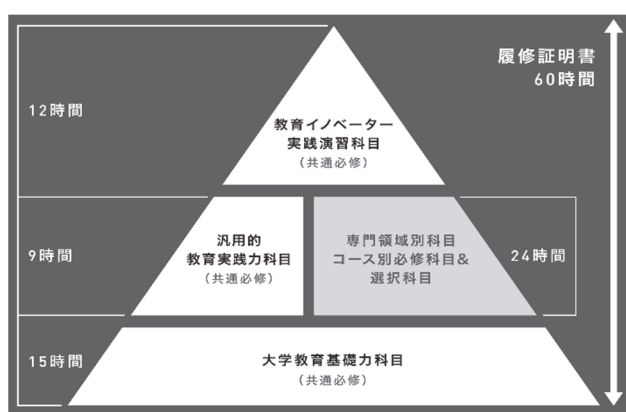
履修証明プログラムの開講・実施経験のある東北大学及び熊本大学において、「産学連携リベラルアーツ教育力育成コース」(東北大学)及び「イストラクショナルデザイン指導力育成コース」(熊本大学)の2コースが先行して、2020年11月1日より開講し、2021年7月に受講者57名に対し、48名が修了した。

(2)第二期プログラム(2021年度)

第一期の2コースに「アントレプレナーシップ教育力育成コース」(大阪府立大学)、「リーダーシップ開発力育成コース」(立教大学)を加え、全4コースで提供した。2021年7月に受講者107名が開始し、97名が修了した。

受講者の属性特徴は、年齢は30~40代が37%、50代が54%、職階別は役員23%、管理職51%、専門職等26%であった。また、東証一部上場企業所属者が43%、受講者の取得学位は学士41%、修士40%、博士19%であった(資料編P.37「4.6 産学連携教育イノベーター育成プログラム 受講者・修了者」参照)。

本プログラムでは、学習支援システム(Moodle)を活用して学習コンテンツ・関連情報を提供したほか、学習内容・方法や評価方法を詳細に確認できるハンドブックも作成・提供し、社会人が計画的に学習を進められるよう支援した(ハンドブックが役立ったとする回答が82.8%)。2020年度の第一期プログラム先行実施の経験、受講者アンケート結果、コンソーシアム運営委員会における意見等を踏まえ、プログラム内容や運営の改善を行ったこと、また、本拠点の代表校・各連携校において新規・継続して本事業担当教職員等を配置して受講者支援等の質向上を図ったことで、受講者アンケートにおいて、高い受講満足度3.6(4件法)を得ることができた(資料編P.38「4.7 産学連携教育イノベーター育成プログラム 受講者アンケート」参照)。



プログラムのカリキュラム構造

日程	内容
2021年7月18日	受講開始日・オリエンテーション
2021年7~9月	大学教育基礎力科目
2021年9~10月	汎用的教育実践力科目
2021年10~11月	専門領域別科目(コース別)
2021年12月~2022年1月	教育イノベーター実践演習科目
2022年3月	第二期生修了

2021年度プログラムの流れ

②大学等と実務家教員のためのマッチングサポート

総合的な FD 拠点としての東北大学の知見に基づき、他の中核拠点と本拠点の人材像等から大学教員・実務家教員としての専門知識・能力を抽出・整理してリストアップし、個々の研修プログラム受講者・修了者が実務家教員候補としての強みや特長を示すことができる形で、研修の履修状況・職歴・学歴等の各個人情報データをデータ化する「大学等と実務家教員のためのマッチングサポートサイト(実務家教員育成研修プログラム受講者・修了者データベース)」を、2021年9月30日に構築・実装した。本システムは、大学教育力を身に着けるための研修プログラム「実務家教員育成研修プログラム」の受講者・修了者と、大学等(大学、短大学、高専門学校、専門職大学、専門学校等)高等教育機関とのマッチングを支援するサイトであり、2021年度末時点で、実務家教員候補である受講者・修了者が337名、求人・採用側である大学等が32機関登録した。

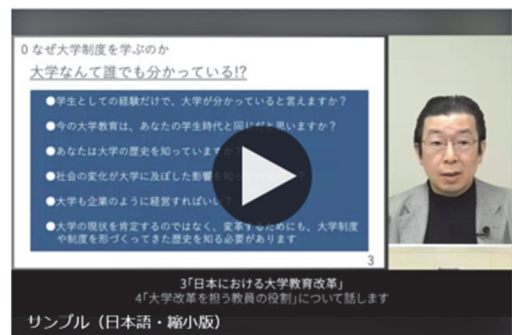


③大学等のための教育 FD コンテンツ

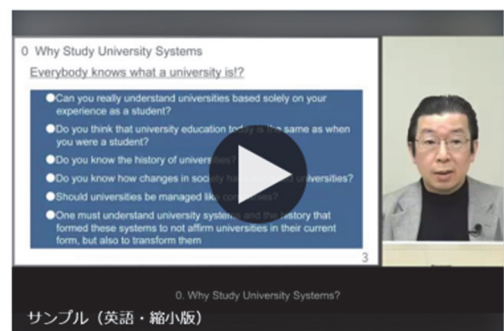
(<https://jitsumuka.jp/fdcontents/>)

研修プログラムの標準化・普及・展開等として、AIBET「大学教育基礎力科目(15時間)」にて活用している動画コンテンツ11本(各30分程)を「大学等における教育FD動画コンテンツ」としてパッケージ化し、うち動画4本は英語版(英語字幕・英語スライド)を制作して日英二言語によるグローバルコンテンツとして広く国内外の高等教育機関が機関利用できる体制を整備した。2021年度は、54機関(受講対象者3,356名)が利用した。これにより、各大学等におけるFD活動の推進・実質化に貢献しているほか、FD教員養成にも活用されている。株式会社全日本空輸など、大学へ実務家教員を派遣している企業においても大学教員養成研修の一部として利用されており、本事業の枠にとどまらない形で、プログラムの標準化・普及・展開等が進展している。

サンプル (日本語・縮小版)



サンプル (英語・縮小版)



3 メンバー

3.1 大学教育支援センター教員・支援スタッフ等

教員	
中村 教博(兼任)	大学教育支援センター長、学際融合教育推進センター長 高度教養教育・学生支援機構 教授(自然科学教育開発室)
戸村 理	副センター長、同 准教授(高等教育開発室)
山内 保典(兼任)	副センター長、学際融合教育推進副センター長 同 准教授(自然科学教育開発室)
赤池 美紀	同 特任助教(高等教育開発室)
大森 不二雄	高度教養教育・学生支援機構 教授(高等教育開発室)
杉本 和弘(兼任)	教育評価分析センター長、同 教授(高等教育開発室)
支援スタッフ	
和田 由里恵	学術研究員
塚部 恵	事務補佐員
今野 文子	専門研究員
稲田 ゆき乃	学術研究員(コーディネーター)
朱 嘉琪	学術研究員(IT 担当)
遠藤 直子	事務補佐員
共同研究員	
高橋 哲也	大阪府立大学 副学長、教授
鈴木 久男	北海道大学 教授
鈴木 克明	熊本大学 教授
吉田 文	早稲田大学 教授
林 隆之	政策研究大学院大学 教授
田中 秀明	明治大学 教授
関沢 和泉	東日本国際大学 教授
王 帥	東京大学 准教授
Andy Leger	クイーンズ大学 准教授
Gabriel Hervas Nicolas	バルセロナ大学 助教
黄 文哲	三重大学 講師
齋藤 渉	東北学院大学 課長補佐
高良 要多	桃山学院大学 職員

3.2 大学教育支援センター 共同利用運営委員会委員

氏名	所属、職名
中村 教博	東北大学 高度教養教育・学生支援機構 教授、大学教育支援センター長
戸村 理	東北大学 高度教養教育・学生支援機構 准教授、副センター長
山内 保典	東北大学 高度教養教育・学生支援機構 准教授、副センター長
山口 昌弘	東北大学 副学長、高度教養教育・学生支援機構 副機構長、教授
三浦 秀一	東北大学 文学研究科 教授
平澤 典保	東北大学 薬学研究科 教授
吉武 博通	情報・システム研究機構 監事、東京家政学院 理事長
合田 隆史	尚絅学院大学 学長
夏目 達也	名古屋大学名誉教授
山口 宏樹	一般社団法人 国立大学協会 専務理事
小林 浩	リクルート進学総研 所長
村山 典久	スカイライトコンサルティング株式会社 事業開発特別顧問
小野寺 芳一	株式会社七十七銀行 常務取締役
小出 秀文	日本私立大学協会 常勤常務理事
宇野 健司	株式会社大和総研 調査本部副部長

4 資料

4.1 PD(専門性開発)分野一覧


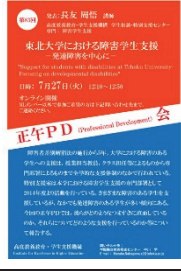
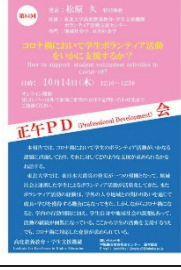
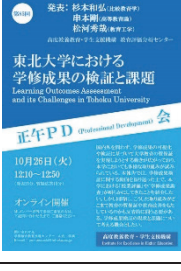

ゾーン	カテゴリー	エレメント
高等教育の リテラシー 形成関連 コード:L (Literacy)	高等教育論 L-01	高等教育の歴史、大学の理念、大学制度・組織、入試制度、関連法制、管理運営、国内外の動向など広く高等教育に関する知識・教養に関するもの
	大学教員論 L-02	大学教員の役割・責務、倫理、キャリア形成など大学教員に関する知識
	教育内容・カリキュラム論 L-03	教養教育論、カリキュラム論など教授する教育内容の教育論に関するもの
	教授技術論 L-04	授業の設計、シラバスの書き方、学習と教授の心理学、教育測定の原理と方法、プロジェクトベースラーニングの進め方、論文・レポート執筆の指導など教授技術に関するもの
専門教育での 指導力 形成関連 (各専門分野) コード:S (Speciality)	学習指導法 S-01	専門分野の学習方法の指導法
	実験指導法 S-02	実験の計画、準備、実施、結果の整理、施設・設備・機器類の使用、危険の防止、倫理的ガイドライン等についての指導法
	研究指導法 S-03	研究テーマの設定方法、関連文献の検索方法、プレゼンテーションの方法、論文のまとめ方、研究費の申請方法等についての指導法
	実務家教員 S-04	産学連携教育、リカレント教育
学生支援力 形成関連 コード:W (Health & Welfare)	学生論 W-01	現代学生論、大学生の発達と学習、学生の生活問題、学生理解とカウンセリングなど学生理解と指導に関するもの
	学生相談 W-02	大学コミュニティへの適応支援の技術、カウンセリングの基礎、コンサルテーションの基礎、グループワークの基礎、人間関係調整法等の指導
	キャリア教育 W-03	進路選択の支援方法、キャリア形成の支援方法、経済的自立の指導
	健康教育 W-04	健康な生活習慣形成の指導法、趣味や余暇活用の指導法
マネジメント力 形成関連 コード:M (Management)	組織運営論 M-01	大学の管理運営、大学のリーダーシップ論、危機管理
	大学人材開発論 M-02	FD/SD 論、教職員開発プログラム作成、キャリア・ステージ論
	教育マネジメント M-03	質保証、入口管理、カリキュラム・マネジメント、出口管理

4.2 PD セミナー分野別一覧

*参加者数:上段合計数、中段(学内者数)、下段(学外者数)

No.	セミナー名	参加者数*	備考
高等教育のリテラシー形成関連 コード:L(Literacy)			
1	第34回東北大学高等教育フォーラム「検証 コロナ禍の下での大学入試」 2021年5月17日(月)13:00~17:30 基調講演1:コロナ禍における個別大学の入学選抜 —令和3年度選抜を振り返って— 立脇 洋介(九州大学准教授) 基調講演2:オンラインを活用した東北大学入試広報活動の新たな展開 久保 沙織(東北大学准教授) 現状報告1:臨時休校・分散登校の下での「学習の遅れ」の回復 近藤 明夫(東京都立戸山高等学校 主幹教諭) 現状報告2:オンラインの現場から—Web 授業のメリット・デメリット— 多田 鉄人(須磨学園高等学校 教諭) 現状報告3:大学入試における教員としての資質・能力の評価 鈴木 雅之(横浜国立大学 准教授)	529 (46) (483)	
2	学生への経済的支援の現状と課題 2021年6月19日(土)14:00~16:00 講師:小林 雅之(桜美林大学教授)	108 (17) (91)	
3	日本の科学研究力失速の現状とその要因 2021年8月7日(土)14:00~16:00 講師:豊田 長康(鈴鹿医療科学大学学長・三重大学名誉教授)	106 (26) (80)	
4	公立大学政策とその将来像 2021年9月4日(土)14:00~16:00 講師:中田 晃(一般社団法人 公立大学協会事務局長)	65 (8) (57)	
5	ポストコロナ時代と「大学」の(時間) 2021年12月18日(土)14:00~16:00 講師:吉見 俊哉(東京大学教授)	148 (27) (121)	
学生支援力形成関連 コード:W(Health & Welfare)			
6	令和3年度 IDE 大学セミナー「大卒キャリアと大学教育」 2021年11月15日(月)14:00~17:00 基調講演:ジョブ型雇用と大卒キャリア 濱口 桂一郎(労働政策研究・研修機構労働政策研究所長) 講演1 :コロナ禍の就活と大卒採用 —東北地方から見たリアリティー— 多田 健一(株式会社リクルート 東北チームリーダー兼リクナビ副編集長) 講演2 :キャリアの多様化を踏まえた大学教育 —キャリア教育の実践を例に— 浦坂 純子(同志社大学教授) 講演3 :大学から職業への移行 —論点整理— 濱中 義隆(国立教育政策研究所高等教育研究部 総括研究官)	250 (36) (214)	
マネジメント力形成関連 コード:M(Management)			
7	SDP シリーズ 第1回(2021年度) 大学等の連携・統合 2021年7月31日(土)14:00~16:00 講師:羽田 貴史(広島大学・東北大学 名誉教授)	121 (14) (107)	

No.	セミナー名	参加者数*	備考
大学変革リーダー育成プログラム			
8	履修証明プログラム 「大学変革リーダー育成プログラム」成果報告会 2021年9月25日(土)13:00~15:50 成果報告1:付属校との高大連携教育の実質化に向けて 川畑真紀(龍谷大学) 成果報告2:New Normalにおける国際化推進のための体制構築 畑中みどり(大阪学院大学) 成果報告3:教員養成単科大学の教職課程における教育の質保証に向けた実践とその課題 佐藤篤(東北学院大学) 成果報告4:学生のロールモデル形成と広報を活用した支援体制の構築 金木宏心(東日本国際大学)		
実務家教員育成研修プログラム			
9	履修証明プログラム 「産学連携教育イノベーター育成プログラム」成果発表会 2021年12月11日(土)、12日(日)、18日(土)、19日(日) 9:00~13:00、14:30~18:30	396 (37) (359)	
10	「実務家教員育成プログラム」受講のススメ 2022年2月19日(土)13:30~14:30	102 (9) (93)	
11	「欧州に学ぶ教育と雇用の接続～産学連携による高度人材の育成に向けて～」 2022年2月19日(土)15:00~18:00 講演1:「変貌するドイツの職業訓練制度:大学教育とのハイブリッド化」 山内 麻理(国際経営学者、国際教養大学 客員教授、日興アセットマネジメント株式会社 取締役(社外)) 講演2:「デンマークの高等教育における教育と職の連繋 イノベーション基金と産学連携博士課程」 鈴木 優美(Madogucci(マドグチ)代表) 講演3:「英国にも新卒採用がある?:似て非なる教育・雇用接続からの示唆」 大森 不二雄(東北大学教授) 提言1:「企業向けリスキリング&学生向けインターンシップ協学講座」 中田 真也(株式会社日立製作所 人財統括本部 グローバル戦略アライアンス部長) 提言2:「産学往還によるT型人材大学院教育への変革」 片山 琢磨(パナソニック株式会社 インダストリー社技術本部 センシングソリューション開発センター所長)	166 (12) (154)	

正午 PD 会			
12	<p>第 81 回正午 PD 会 「1年生に向けた二つの理科実験科目」 2021年6月14日(月)12:10~12:50 講師:富田 知志 (東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学際融合教育推進センター 准教授)</p>	20 (20) (0)	
13	<p>第 82 回正午 PD 会 「図形たちの空間—かたちの近さを測る—」 2021年7月14日(水)12:10~12:50 講師:中島 啓貴 (東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター 助教)</p>	17 (17) (0)	
14	<p>第 83 回正午 PD 会 「東北大学における障害学生支援 —発達障害を中心に—」 2021年7月27日(火)12:10~12:50 講師:長友 周悟 (東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学生相談・特別支援センター 講師)</p>	17 (17) (0)	
15	<p>第 84 回正午 PD 会 「コロナ禍において学生ボランティア活動をいかに支援するか?」 2021年10月14日(木)12:10~12:50 講師:松原 久 (東北大学 高度教養教育・学生支援機構 ボランティア活動支援センター 特任助教)</p>	12 (12) (0)	
16	<p>第 85 回正午 PD 会 「東北大学における 学修成果の検証と課題」 2021年10月26日(火)12:10~12:50 講師:杉本 和弘(東北大学 高度教養教育・学生支援機構 教育評価分析センター 教授)、串本 剛(同 准教授)松河 秀哉(同 講師)</p>	48 (48) (0)	
17	<p>第 86 回正午 PD 会 「大学史研究と大学人材養成のあいだで」 2021年11月8日(月)12:10~12:50 講師:戸村 理 (東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター 准教授)</p>	26 (24) (2)	

18	<p>第 87 回正午 PD 会 「東北大学におけるオンラインによる入試広報活動の実践と評価」 2021 年 11 月 30 日(火)12:10~12:50 講師:久保 沙織 (東北大学 高度教養教育・学生支援機構 入試開発室/入試センター 准教授)</p>	23 (23) (0)	
19	<p>第 88 回正午 PD 会 「新英語カリキュラム:一般学術目的の英語運用能力の育成を目指して」 2021 年 12 月 8 日(水)12:10~12:50 講師:桜井 静 (東北大学 高度教養教育・学生支援機構 言語・文化教育センター 准教授)</p>	25 (25) (0)	
20	<p>第 89 回正午 PD 会 「高校から大学への橋渡し ー入学前海外研修プログラムの取り組みー」 2021 年 12 月 15 日(水)12:10~12:50 講師:林 聖太 (東北大学 高度教養教育・学生支援機構 グローバルラーニングセンター 特任助教)</p>	27 (27) (0)	
その他			
21	<p>The Fourth J-CLIL TOHOKU Chapter Conference 第 4 回 J-CLIL 東北支部大会 2021 年 7 月 17 日(土)14:00~18:10 招待講演: CLIL implementation: balancing excellence, equity and equal opportunity in public schooling Elisa A. Hidalgo McCabe (Complutense University of Madrid) 基調講演: CLIL Teacher development in Spain and Japan - programmes and challenges María Dolores Pérez Murillo (Complutense University of Madrid, Madrid, Spain) Elena del Pozo (CRIF Las Acacias Teacher Training, Madrid, Spain) 土屋 慶子 (横浜市立大学准教授)</p>	62 (11) (51)	
22	<p>東北大学学生ボランティア支援 10 年検証シンポジウム 2021 年 12 月 5 日(日)13:00~16:10 講演1: 東日本大震災直後の学生ボランティア支援からみる意義・課題 米村 滋人(東京大学 教授) 講演2: ボランティア活動支援からサービスラーニングへの展開 ー学生支援・地域貢献・市民性教育の一体的展開とその意義・課題ー 藤室 玲治(被災地に学ぶ会代表) 講演3: 正課・課外リンクによる被災者/被災地支援の継続とその意義・課題 松原 久(東北大学 高度教養教育・学生支援機構 特任助教)</p>	67 (32) (35)	

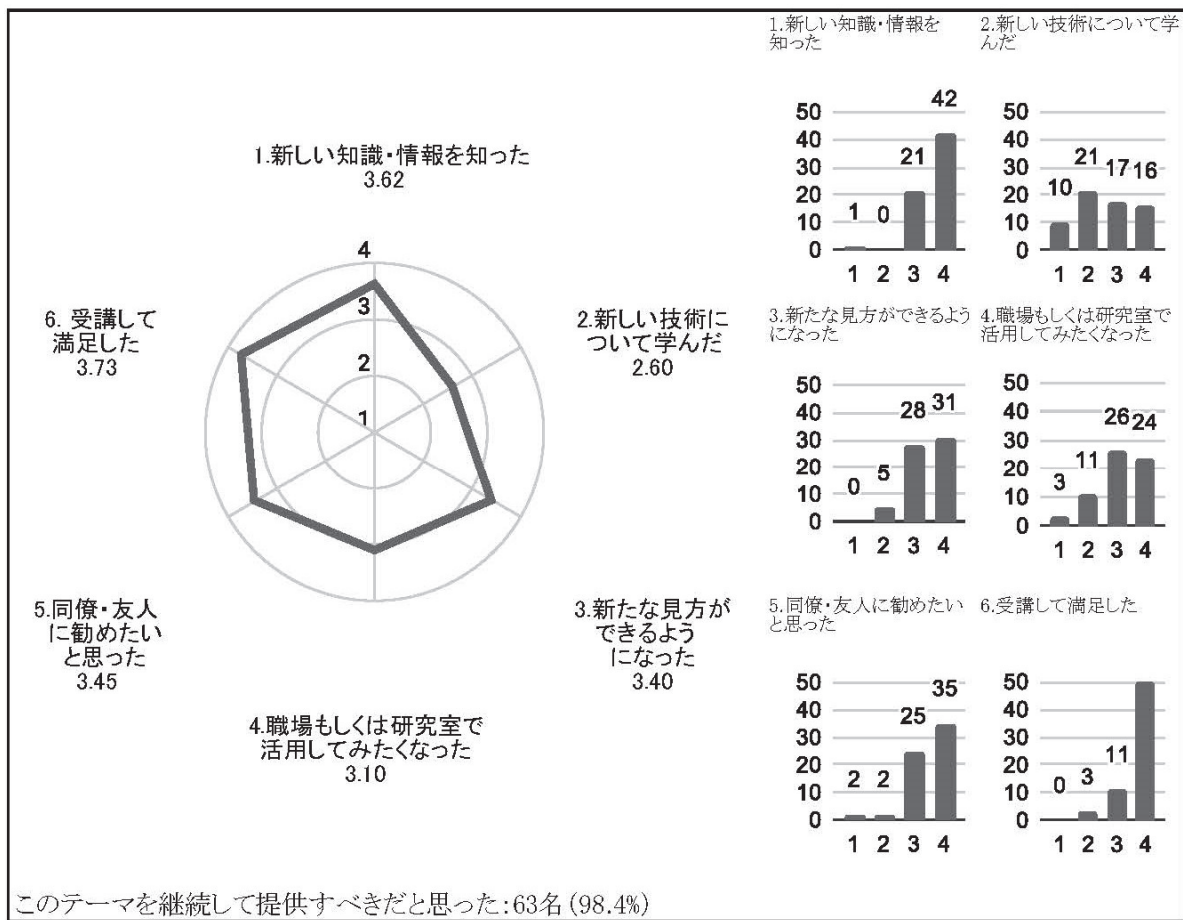
23	<p>地方創生と地方地域大学の国際化に関するオープンセミナー 2022年2月17日(日)13:00~15:00 講師:渡部 由紀(東北大学 高度教養教育・学生支援機構・准教授) Angela Yung Chi Hou(College of Education, National Chengchi University) Grace Lu(Graduate Institute of Education, Tunghai University) Hua-Chi Chuo(Higher Education Evaluation and Accreditation Council of Taiwan) 塚田 亜弥子(東京大学教育学研究科 研究員)</p>	93 (7) (86)	
24	<p>東北イノベーション人材育成コンソーシアム主催シンポジウム —外国人として日本で働くこと— 留学生から高度外国人材へ 2022年3月22日(火)12:45~15:00 基調講演:「出会いこそ、生きる力」 サヘル・ローズ</p>	60 (31) (29)	

2021年度PDプログラム参加者総数 延べ2,488名

4.3 PD セミナー参加者アンケート結果

高等教育のリテラシー形成関連 コード:L(Literacy)	
2021年 6月19日(土) 14:00-16:00	学生への経済的支援の現状と課題
講師	小林 雅之(桜美林大学 教授)
回収率 = 59.3% (64/108)	
回答者属性(N=64)	
【職階】教授(11)/准教授(12)/講師(3)/助教・助手(3)/管理職教員<学長~学部長>(0)/博士課程(2)/職員<部長・課長以上>(7)/職員<係長・主任・一般職員等>(21)/その他(5)/無回答(0)	
【性別】女性(20)/男性(44)/無回答(0) 【学内外】東北大学(6)/他大学等(58)/無回答(0)	

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・ これまでの奨学金についての歴史。
- ・ 奨学制度に関すること。
- ・ 教育費負担や国立大学の財政負担、奨学金政策の国際比較研究。
- ・ 奨学金や無償制についての基本的考え方や理念、諸外国の事情。
- ・ 授業料政策を巡る論争の解説などが参考になりました。
- ・ 金融リテラシーを学生教育の重要な一部として位置づけるべきである、というご主張に沿った教育カリキュラムの構築を目指す必要を感じました。
- ・ 大学の情報公開が機会均等には欠かせないと感じた。
- ・ 日本型 HECS。授業料後払い制度が導入できれば、学生の経済的な負担も解消できると感じた。
- ・ 学生支援制度の国際比較およびマクロな視野。
- ・ 情報ギャップの問題、奨学金に対する考え方について(国民性、政策意図等から理解することが必要)
- ・ 大学等修学支援法による新制度に対する小林先生の見解がお聞きでき、大変興味深かったです。
- ・ 日頃より奨学金制度に関する高校側の知識不足を感じていました、今日のご講演の内容からも、高校と大学側が連携して、奨学金制度の適切な利用について知識を共有し、学生支援に役立てたいと思いました。
- ・ ①奨学金の情報ギャップの問題について、お話を伺い、これまで自分が考えていたより重要視すべきと認識が変わった。②詳細がわからないことが多い官邸における検討に関連したエピソード。

- ・高等教育の修学支援新制度についての概要、課題がよく理解できました。
- ・高等教育修学支援制度の課題、海外各国の取り組みを学ばせて頂き、大変勉強になりました。
- ・大変重要でホットなテーマなので、全体的に聞いて良かったと思える内容でした。復習的なところもかなりありましたが、知識のおさらいも大事ですし、参加者との質疑で論点が整理され、勉強になりました。
- ・コロナ禍後の大学経営。学生が疲弊することは、とりもなおさず大学の疲弊となります。いよいよ体力勝負となり、二極化が進むものと思われます。私学の場合、定員割れは経常費補助金のカットとなります。奨学金で集めてきていた学生がドロップすることは、これまでのダメージと違って想定外に大きなものになるはずで、これまでならば、定員の7割までの充足ならば、何とか何とかなってきましたが、これからは、人件費の圧縮に手をつけざるを得なくなります。消沈した教職員が学生を元気にすることはできるのでしょうか。この10年間の間に300校はおかしくなり、その多くがリングを去ることになるのではないのでしょうか。経産省、内閣府は、大学の数が多いいことを問題視していますので、文部科学省が逆立ちしても大学は救済できません。ちなみに、弱者と弱者が手を携えても、弱さが相乗されるだけです。大学教職員10万人が路頭に迷うことになるのに、このあたりについての議論があればなと無い物ねだりをしていました。
- ・奨学支援の考え方。
- ・高等教育の修学支援新制度を利用する対象となる低所得者層において、専門学校へ進学する割合が高く、且つ、制度自体の認知度及び理解度が低い層であることを再認識した。十分な知識や情報を理解できず、制度の恩恵を受け損ねることがないよう、奨学金業務の現場において、わかりやすく情報提供をしていく必要がある。また、高等教育の修学支援新制度の根本にある「新しい経済政策パッケージ」が経産省主導の支援であり、今後の機関要件における更新事項が現状を受け、どのように変動していくのか注視していきたい。修学支援新制度導入により、今後の少子化を背景とする奨学生の獲得は高等教育機関間でより活発化していくこととなり、特に専門学校においては教育の質が問われている。例えば、オンライン教育に対応しうる柔軟性を持っているか、奨学金制度を組み合わせた独自の支援制度を確立しているか等、学校のあり方、発信の仕方が進路選択に直結していることを留意し、今後の業務運営に活かしていきたいと考える。
- ・奨学金1点の見方ではダメだということを再認識した。物事を多方面から洞察することの必要性を改めて教えて頂いた。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・奨学金が増えると財政的にどのような影響を受けるのか。
- ・日本における高等教育政策の方針から2017年の転換点の意義と課題。
- ・戸村先生からご質問のあった国立大学の授業料政策(値上げ及び学部別授業料の導入)について、小林先生ご自身の見解がもっとお聞きできると良かったと思います。回答しにくいと思いますが…。
- ・小林先生が大変に分かりやすくお話し頂き感謝いたします。
- ・日経新聞2021年6月1日付け朝刊の小林先生のご提言が、より深く理解できました。やはり話し言葉でのご説明は、ストンと腑に落ちます。

4. セミナーに関しての意見・感想

- ・とても参考になるお話をありがとうございました。
- ・大変勉強になりました。小林先生の講義部分、また後半の質疑応答にも多く時間が取られておりましてありがたく存じます。
- ・大変勉強になりました。小林先生、東北大の先生方、どうもありがとうございました。1点、セミナーへの参加案内が2~3日前に届く予定とのことでしたが、当日にしか受け取れませんでした。こちら側の問題なのかとも思いますが、フリーメールでは受け取れない仕様だったのか、ご確認いただければと思います。
- ・日本型HECSを導入している大学があれば、後払いで授業料を確実に回収できているかを知りたい。
- ・高等教育無償制の効果研究等。
- ・年度末から今年度にかけて、急に変更された点が多く戸惑いましたが、その理由が良く分かりました。今後より良い制度となるよう見直しが行われていくのですね。学生にとってもっと優しい制度となるよう願っております。
- ・提供いただいた世帯収入等の統計調査の他、保護者が奨学金制度をどのように考えているか等の調査についても情報があれば知れたかった。
- ・リーマンショック時、日本は他の多くの先進諸国と異なり高等教育への公的支出を減らす政策をとった。今回の新型コロナにおいてもバイデン政権がAmerican Families Planなどで日本とは2、3桁異なる高等教育への支援を行おうとしている。新型コロナ禍に際しての主要国政府の学生支援等の高等教育支援とその影響について、2、3年後にでも再度小林先生のお話を伺えれば幸いです。
- ・小林先生の講義は分かりやすく、時間が短い中横断的にご説明いただいたことで、修学支援制度について多角的な視点でとらえることができました。
- ・様々な角度の質問に対して、小林先生が即座に明快に回答して下さり、ご講演以外のお話も伺えて良かったです。
- ・今回のようなテーマであれば、質疑はもう10分程度長くても良かったかもしれません。色々なコメントが聞きたかったです。
- ・ありがとうございました。小林先生のお話、さらにはこのような貴重な2時間の場を設定してくださいました東北大学高度教養教育・学生支援機構大学教育支援センターの皆さまに敬意を表します。お願い: 今後は、URL配布の時に、レジュメをおおくりいただきたくお願いいたします。貴重なお話、事前学習をしておきたいところです。このカタチとすれ場、Q&Aもさらに充実するのではないかと思います。
- ・税金、特に私学助成によって、教育が施されているという意識を学生が再認識する必要がある。それが社会貢献に繋がっていくことを念頭に明確な情報公開と共に、奨学金説明会においてもわかりやすく語りかける必要があると感じた。
- ・平日は業務等でなかなかゆっくり受講することは難しいが、土日等で時間が合えば是非ともまた色々なお話を聞かせて頂きたいと思いました。

高等教育のリテラシー形成関連 コード:L(Literacy)

2021年
8月7日(土)
14:00-16:00

日本の科学研究力失速の現状とその要因

講師 豊田 長康(鈴鹿医療科学大学 学長・三重大学 名誉教授)

回収率 = 46.2% (49/106)

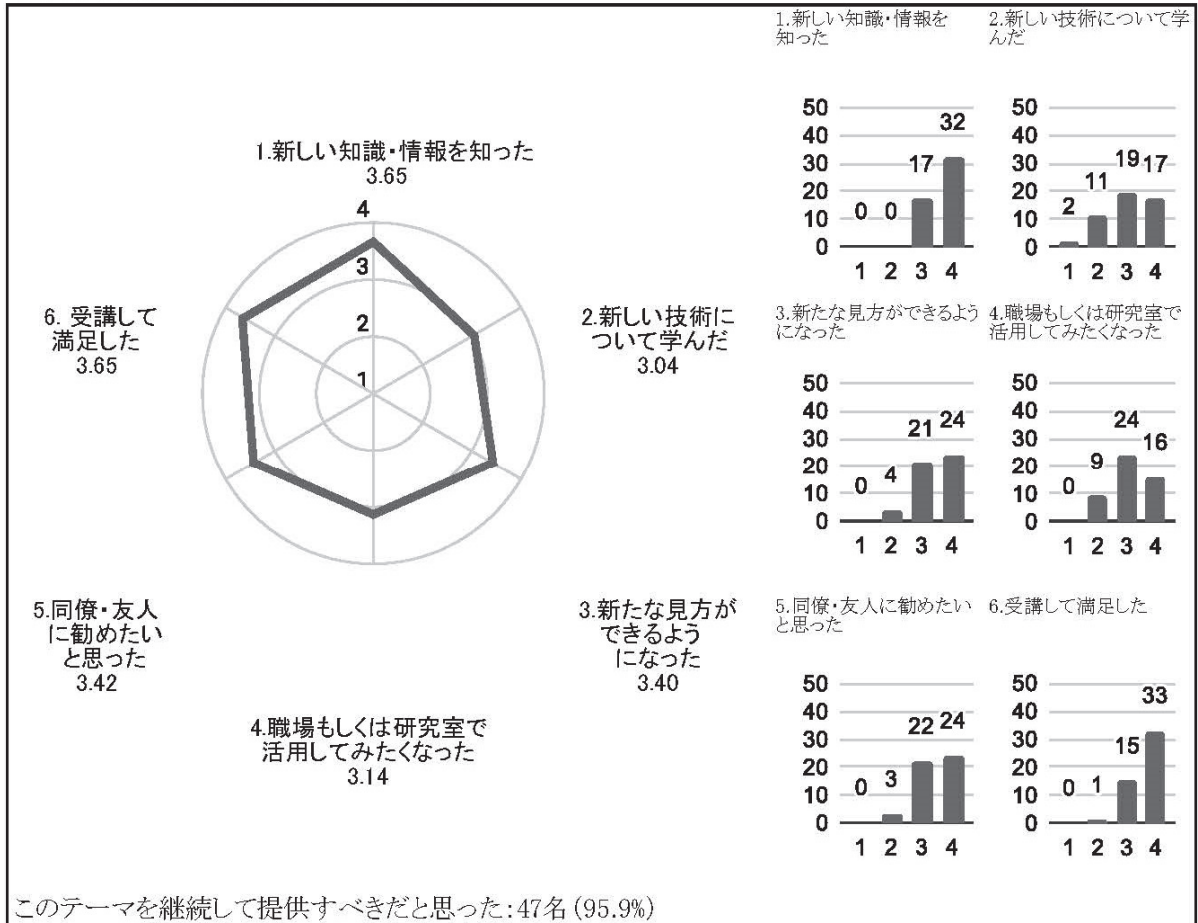
回答者属性(N=49)

【職階】教授(12)/准教授(6)/講師(6)/助教・助手(2)/管理職教員<学長~学部長>(2)/博士課程(2)/職員<部長・課長以上>(8)/職員<係長・主任・一般職員等>(7)/その他(4)/無回答(0)

【性別】女性(13)/男性(34)/無回答(2)

【学内外】東北大学(11)/他大学等(38)/無回答(0)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・日本のアカデミアの停滞は国策の失敗。
- ・これほどまでにはっきりと法人化以降の傾向が現れているということに驚いた。
- ・現状把握ができ、幅広く役立ちそうです。
- ・指標の意義。
- ・政治家や官僚が動いてくれないこと。
- ・日本の研究力低下の実証的資料の提出。
- ・現在挙げられてる指標が有用でないという点。
- ・すでに著書を拝読しておりました。豊田先生の生の声でのご説明、質疑応答が大変興味深かったです。当然傾斜配分には反対ですが、抗えないのどのようにつき合っていくべきかを大学では考えております。今回の資料を企画評価担当副学長にお渡しして少しでも良い方向に向かわせたいと思います。
- ・日本の研究力低下の要因、研究者の層の厚みが原因となること。
- ・なんとなく感じていたことがデータで示されて納得できた。
- ・日本の研究力の失速と国立大学法人化にこれほど明確な関係があるとは思いませんでした。さらに、米中だけではなく欧州各国や韓国にも追い越されていることに驚きました。
- ・台湾大学の研究力失速。
- ・私は博士課程を出たばかりです。今の大学をとりまく状況がとてもよくわかりました。今後自分がどのようにキャリアを積むべきか(積むことができるのか)、そして日本のこれからを考える際に、とてもためになるお話を伺えました。
- ・日本の研究力の失速は、論文の質と量の低下というかたちで著しく表れており、その要因が運営費交付金減額と不適切な指標に基づく

選択と集中によるものだという知見。

- ・日本の高等教育政策において EBPM が機能していないという点について客観データで示していただけて大変興味深かったです。
- ・データに基づいて分析し施策・政策を考えていく姿勢。
- ・課題に即し、データに立脚した立論。
- ・マイケル・サンデル他の方が生まれながらの格差を指摘しているが、所属大学によっても差が生じることは恥ずかしながら初めて知った。
- ・研究力の可視化をどのようにするのか IR 専門職としてどのように今後作っていくのか参考になりました。
- ・本学内の IR においても先生の解析手法、データの活用をしたいです。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・将来の姿がよくわかりませんでした。失速の確認はできませんでした。
- ・WoS の InCites や Benchmarking を用いたデータ整理が多かったのが、最初にその具体的な方法を例示いただけると有難かったと思います。
- ・数多くの指標の求め方。
- ・著書を読んでおりましたので、よくわかりました。
- ・国レベル・大学レベルへのフィードバック。
- ・科学研究力の低下が、経済力や国民幸福度へも波及してくると懸念しています。
- ・台湾の事例についても日本と同様の傾向があるのであれば、そちらについても精査していただけるとより説得力があったかと思えます。
- ・国立大学法人化の関連施策も研究力低下の原因であろうが、その背後の大きな日本社会の問題がより根本的な原因ではないか、という感じがしたこと。
- ・オープンデータの活用方法について理解できたが、分析手法の部分をもう少し聞いて見たいと思いました。

4. セミナーに関しての意見・感想

- ・今回は、音量に差があり過ぎたようです。
- ・いつもながらのデータに基づいた説得力ある科学的分析、ありがとうございました。質問でもありましたが、やはり政策決定に結び付ける運動論が必要ですね。樋口さんと同様に国大協創設時にお世話になりました。ありがとうございました。
- ・こうしたセミナーの準備・運営自体が研究時間を損なうことにならないか心配になりますが、大変貴重な機会をどうもありがとうございました。
- ・貴重な機会を提供くださり、ありがとうございました。
- ・大変有意義でした。ありがとうございます。
- ・企画者の方々、ありがとうございました。
- ・著書読みたいと思います。
- ・本学は今日から夏休みですが夏休みが明けたら職場の方にも見てもらいたいです。ぜひオンデマンド配信していただきたいです。
- ・具体的に政策への反映をお願いしたい。
- ・司会、参加者に比して、豊田先生のお声が聞き取りづらかったです。
- ・今後とも日本の競争力につき訴求すべきテーマがあれば積極的に取り上げていただきたい。
- ・貴重な機会をご提供いただき、ありがとうございました。
- ・大変参考になりました。大学で実際に事務を行っているものとして、運営費交付金削減により、プロジェクト期間がある外部資金で研究室では秘書を雇わなくてはならず、そのことが先生方の事務作業の時間を増やすことにつながっている現在の状況に納得がいきました。今後、東北大学でも事務の集約化を行っていく方向であり、部局の事務室が縮小していくなかでさらに先生方の事務作業の時間増、研究活動時間減につながっていかないと心配になりました。
- ・若干講演者の音声レベルが小さかったように思いますので、今後は講演前に簡単な音声チェックなどをしておいていただけるとありがたいです。
- ・自大学の教員の研究環境の改善に使いたいと思った。
- ・今日のお話が政府の政策にしっかりと反映されるよう、インパクトのある動きにしていく必要があると思った。そして、そこにいろいろな人が関わられるよう、その一翼を担うべく動きたいと考えた。
- ・旧帝大から地方国立大に異動したが、基盤経費削減の影響は既存の設備の老朽化という点で金額以上の影響を及ぼしていることを肌身をもって知った。3倍頑張った程度では帝大の足下にも及ばない。敗戦直後の研究者のようなしびれとさと工夫が必要だが、さすがに心が折れる人もいると思う。
- ・本日は大変貴重な講演、ありがとうございました。豊田先生の素晴らしい人柄が現れていて、とても分かりやすく勉強になりました。科研などは、国民の皆さんに役に立つ研究をするように言われているのに、豊田先生ほどの立派な研究をなさっていても、国が認めないという現実には本当に悲しく感じました。アメリカの大学は、移民や留学生の学生が多くおり、研究を下支えしていますが、日本も博士課程は、外国人留学生がほとんどを占めています。優秀な留学生が日本の研究を支えていってくれればいいですが、アメリカのように予算や設備もないところでは、研究成果は出にくく、かつ、国内学生の研究者が育たなくなっていると危惧しています。豊田先生には引き続き、こういった若手研究者の動向や migration についても調査していただきたいと感じました。
- ・今回のテーマの展開系として、国内の研究所所長のような、研究を推進する立場の方々によるパネルディスカッションがあったらいいなと思いました。

高等教育のリテラシー形成関連 コード:L(Literacy)

2021年
9月4日(土)
14:00-16:00

公立大学政策とその将来像

講師 中田 晃(一般社団法人 公立大学協会 常務理事・事務局長)

回収率 = 43.1% (28/65)

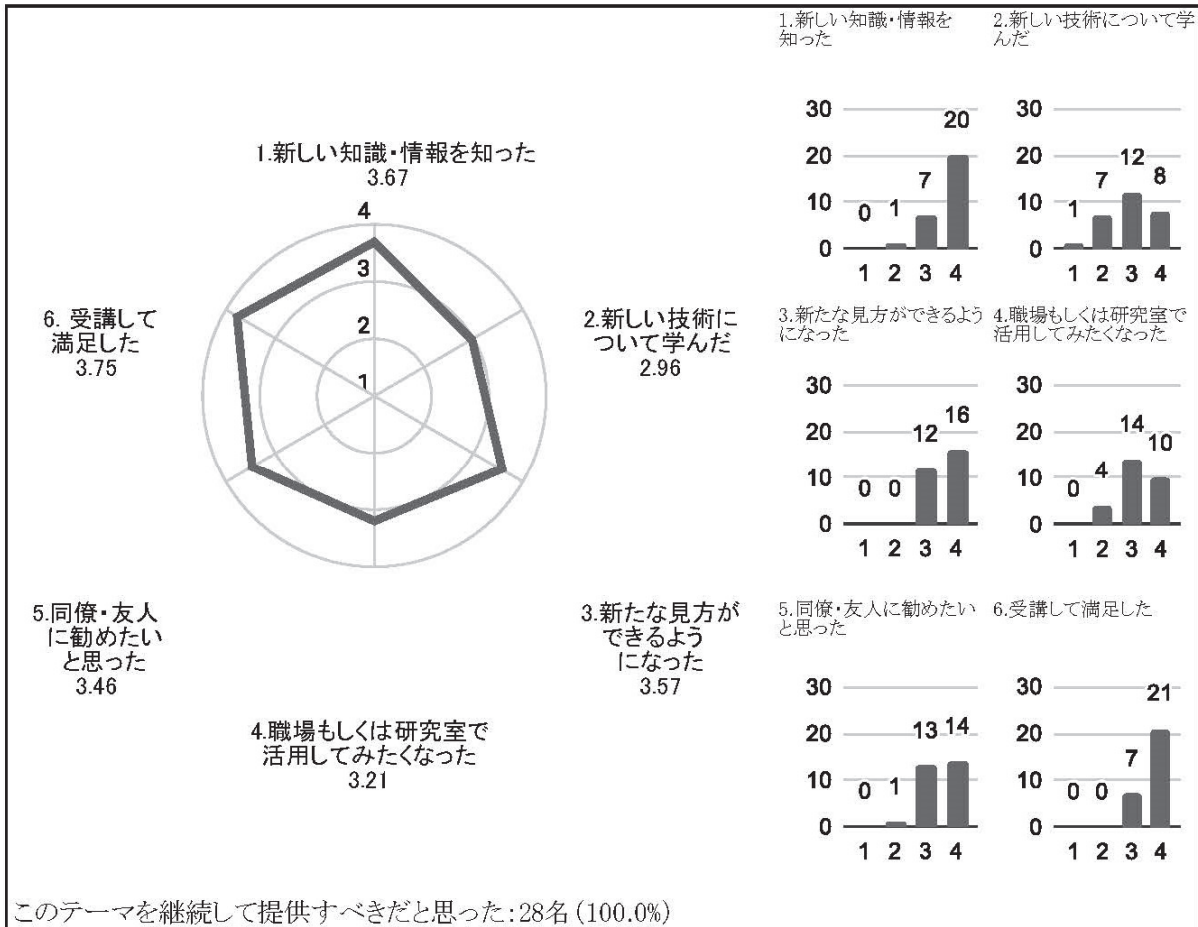
回答者属性(N=28)

【職階】教授(5)/准教授(4)/講師(1)/助教・助手(1)/管理職教員<学長~学部長>(0)/博士課程(1)/職員<部長・課長以上>(4)/<係長・主任・一般職員等>(6)/その他(6)/無回答(0)

【性別】女性(5)/男性(22)/無回答(1)

【学内外】東北大学(3)/他大学等(25)/無回答(0)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・ 公立大学・公立大学法人運営と政策のマッチングだけに視点を置いていたが地域住民の声、政策誘導との融合によって成り立つ視座として「政策の窓」を通しての説明はよく理解できるものでした。
- ・ 政策の窓モデルの高等教育政策分析への適用。
- ・ 政策起業家というスタイル。
- ・ 公立大学の設置の歴史と財政構造、政策の窓モデルが、今後よりよい大学改革を進める上での指標の一つとなると思いました。
- ・ 公立大学政策の現状、政策過程の分析手法。
- ・ 平成期の公立大学の設置は、様々な観点で考えなければならないことを知りました。
- ・ 高等教育政策であり語られることのない公立大学の成り立ちについての知識。
- ・ 公立大学から見た国立大学の姿、岩手県立大学の設立経緯など。
- ・ 政策の窓モデルの丁寧なご説明で、大変分かりやすく公立大学の政策過程が理解できました。
- ・ 政策起業家。
- ・ 政策が実現されるさまざまな要因。公立大学設置のさまざまな流れ。
- ・ ヒヤリング内容のご紹介が具体的に役に立った。
- ・ 公立大の政策背景をまとめてうかがえました。今回の知見を参考にして、関係する地域の高騰教育に関心を持っていきたいと思えます。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・ 「政策の窓」について、事前に中田先生の著書を拝読してから、受講すれば、より深く理解できたと思っています。事後に手元の速記や資料を読んでみて、「アクター」のそれぞれの役割についてようやく理解ができました。

- ・「高等教育を地方自治で行わなければならないのか」という点がよくわからない。公立大学の目標には国立や私立のそれと合致するものが少なくないから、公立大学の独自性が明瞭でないような気がします。
- ・ACF(?)のスライドについて説明いただきたかった。
- ・定員割れの問題は、少子化の中で大きな問題だとあらためて認識しました。

4. セミナーについての意見・感想

- ・公立大学法人化した場合でも、よく行って運営している職員の半数レベルであり、若年層の場合は「未経験者」として扱われ、経験者採用かつ、私学の企画担当経験者であっても、「作業業務」(非企画運営系業務)に追われている。そうした実情の打破について、もう少し中田先生の私見でも結構ですので、ヒントをいただきたかったです。
- ・国・私立大学に比べて分かりにくい公立大学の設立の仕組みや要因について分かりやすく説明されていて大変興味深い内容だった。
- ・公立大学の最近の増加傾向についてなんとなく感じていたことを体系的にまとめていただき頭の整理ができました。ありがとうございました。
- ・新任教員として公立大学に着任した経験を持つものとして、当時今回のお話を聞くことができたら、大学の特性を踏まえ一職員としてどう貢献できるかをもう少し具体的に考えて行動できたのではないかと思います。当時は新任でしたので「大学教員」としてどうあるべきかを考え行動することだけで精一杯でした。また、大学の使命などは大学イベントや会議の議題の中でなんとなく感じ取れるような程度で、構造的な理解には至っておらず、当時の同僚も同じような認識であったと思います。改革はトップダウンも必要ですが、最後にテコとなるのはボトムアップの力であり、ボトムアップなくして改革の成功は無いように思います。それは、政策起業家の志を持つ職員を自らの組織に増やすことにもつながると考えます。そのためには、遠回りであってもやはり職員の意識改革を丁寧に行っていく努力と覚悟が必要不可欠だと思いました。
- ・非常にわかりやすく回答して頂きました。
- ・非常に有益でした。
- ・画像、音声とも良好でした。

高等教育のリテラシー形成関連 コード:L(Literacy)

2021年
12月18日(土)
14:00-16:00

ポストコロナ時代と「大学」の〈時間〉

講師 吉見 俊哉(東京大学 教授)

回収率 = 62.8% (93/148)

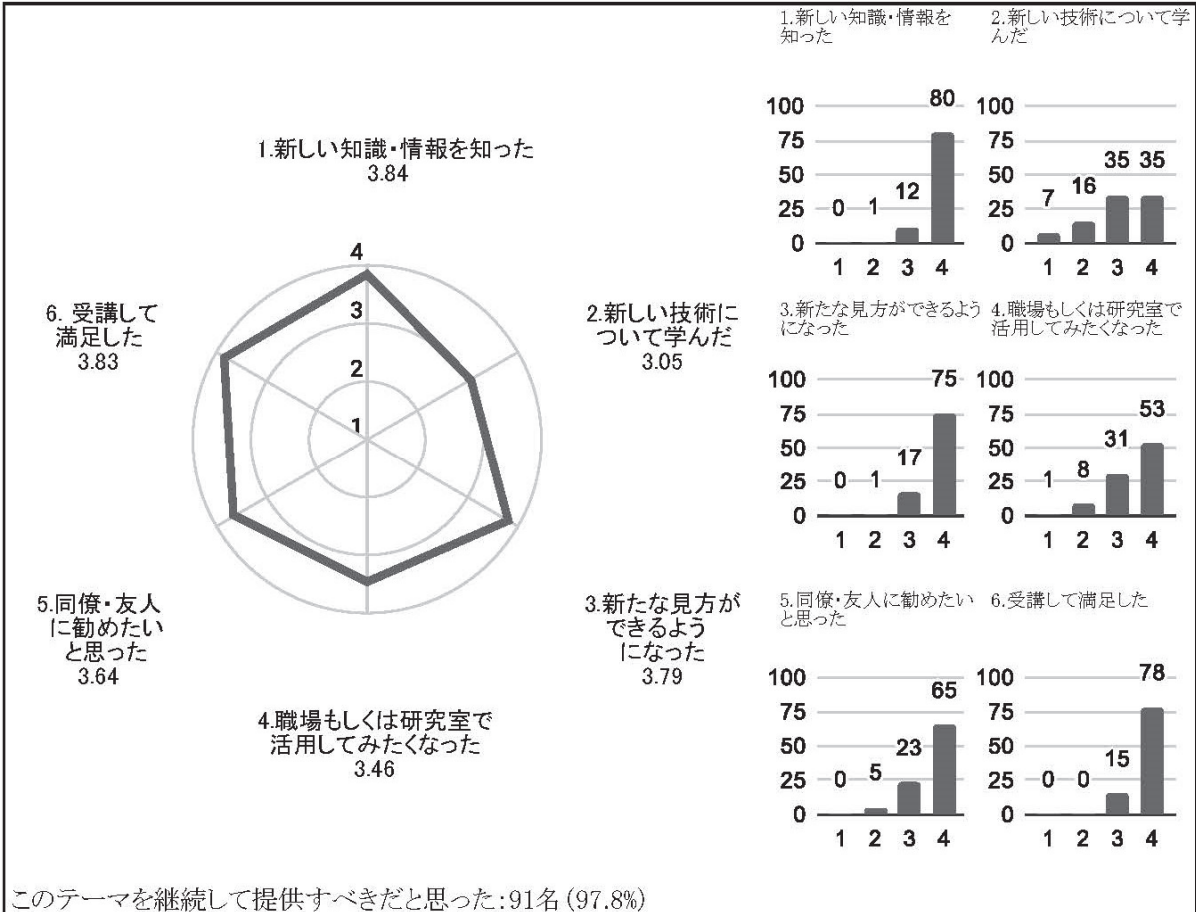
回答者属性(N=93)

【職階】教授(19)/准教授(10)/講師(1)/助教・助手(3)/管理職教員<学長~学部長>(2)/博士課程(4)/職員<部長・課長以上>(14)/職員<係長・主任・一般職員等>(26)/その他(14)/無回答(0)

【性別】女性(24)/男性(67)/無回答(2)

【学内外】東北大学(13)/他大学等(80)/無回答(0)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・セメスターまたはクォーター当たりの履修科目数の削減。
- ・大学教育についても、利便性の観点からオンライン全盛であるが「時間と空間のフィジカルな共有」というもっともな価値を、後ろから支えていただいている感じがしました。
- ・高等教育の実情をさらに理解できる方法を学びました。
- ・「人生で3回大学に行く社会」は、たいへん示唆に富むお話でありました。今後の大学の可能性について希望があると同時に、日本社会の課題も考えることができました。
- ・クォーター制導入について改めてその重要性を認識しました、本学でも導入していますが、なかなか浸透しません。クォーター制活性化のGPについて、様々な意見があるかと思しますので、大学教育学会等で議論が行われるとよいと思いました。
- ・学生の履修科目を減らすこと、教職員の時間の劣化を防ぐこと、遊びからものごとを考えること。組織内、組織間の水平統合、越境をめざすこと。身体感覚を取り戻すことが大切(これは戸村先生)。
- ・文理複眼的な捉え方は重要だと思います。そのためにも、教養科目をむしろ専門科目の後に履修できるようにするというのも、1つの策と思っています(森嶋通夫が『なぜ日本は没落するか』で述べてましたが…。というか、いわゆる教養科目(入門的、概観的講義)はいつでも履修できる事が望ましいようにも思います。
- ・教員の時間について、学内での議論をしてみたいと思った。
- ・大きな視野で大学を問直すこと、およびそれについて語ること。
- ・リメディアル教育を提供する大学ならではの意義を改めて学びました。ありがとうございます。当たり前を問う能力は批判的能力と単純に言い換えても、それを議論なく通信で涵養するカリキュラムを構築できるか本学で疑問です。
- ・「履修」のレベルで有限の時間をどう有効に使わせるかという部分がとても参考になりました。

- ・ 歴史的な変遷の中でグローバル化はこれからも続くと思われ、そこで知の創造がなされてきたし、これからもなされていこうというお話に共感しました。交流、対話、相互作用といった営みをどのように維持していくかが大学教育において重要だと考えました。また、そうした教育の蓄積に裏付けられることで、日本の研究力も高まっていくだろうと感じました。
- ・ 在学中の取得単位数については示唆に富む内容でした。
- ・ 大学は物事を考える場所なのだと思えば、言いたいことをグツと飲み込んで大学生が自走するのを見守ることの大切さを改めて学びました。
- ・ たくさんの論点に対する考えの進め方に触れ、圧倒されてしまいました。振り返ります。今後行動を決める際、もっとじっくり考えて臨みたいと思います。目的遂行型というより価値創造型の役立ち方をしようというご講演でした。
- ・ ウェビナーとは感じないくらいの熱量でした。対面で体感したいセミナーでした。
- ・ 大学を空間の時間の枠組みでとらえ直すという視点。
- ・ 大学の存在価値が、「既存の当たり前に add-on する」のではなく「当たり前前に疑問を呈し、新しい価値を創造する」ということが、「目的遂行のための有用」から価値を創造する自由を手にするために必要であると理解しました。
- ・ 地方大学がグローバルなつながりを持つうえでバラバラではダメだという指摘は重要と痛快しました。
- ・ 密なコミュニケーション、開かれたコミュニティ、身体性。
- ・ 教員の時間の劣化という話題に強く共感しました。1人3役の負担軽減について考えさせられました。
- ・ 身体性の重要性。
- ・ 寮の役割について。
- ・ 「授業科目を減らすべき」という提言が目からうろこであった。今後、18歳人口は減るものの、大講義室での大量講義の形態から、インタラクティブな形式のティーメイド授業へシフトし、少人数に多目的に授業が変容するような気がしていた。
- ・ 授業の対面・リモートの使い分け、4学期制の考え方、履修科目の削減、地方大学のリソースの考え方・発揮の仕方、TAの位置・活用、英語による留学生との交信。
- ・ 目的遂行的な意味だけではなく、価値創造的な意味でも役に立つかと思いました。大学に関わる人間にとって重要な示唆をいただけたかと思います。
- ・ TAについての考え方。
- ・ 歴史・全体の制度の内容からクォーター制や学年暦の背景にある考え方など、今まで思っていた以上に今後の大学の在り方について考える事項は多いことに気付くことができました。
- ・ 甲殻類社会、甲殻類大学という視座が盲点でした。
- ・ 大学の歴史、日本の大学とアメリカの大学の比較に関して大変勉強になりました。
- ・ 学生の自律的学修の時間が少ない問題については、以前から履修科目数が多いことが原因であると考えていましたので、本日の吉見先生のご講演を聴講させていただき、改めて日本の大学もその方向に舵を切っていかなければいけないとの思いを強くいたしました。
- ・ 私は理系分野(化学)人間なので、吉見先生の教育に対する考え方は少し違っていると思うが、今後問題の多い(日本及び世界の)社会において、全ての大学生が、社会をよくするためにどう関与しながら、創造性に富む解を見出し実践していくことが重要と考えます。そのためには、現在の学んだことにする教育から、誰もが必死で自律的に勉強し、独自の理解と考えを持てるようになるまで訓練する体制を構築することが重要であると考えています。我が国には、それを実践可能な大学教育改革は必要と考えています。
- ・ オンデマンド授業の捉え方。
- ・ 学際的なものの考え方と教養教育とグローバル教育の重要性を認識して教育に携わる。
- ・ 資源がある地方をダイレクトにグローバルにつなぐこと。やってみます。
- ・ 大学の起こり、単位制、人社系と理系という観点からのダブルディグリー、大学という場での人的交流の重要性。機関別認証評価への対応に何かしらしたいと思います。
- ・ 大学の誕生から、その歴史の変遷。日本と英国の大学教員のコミュニティの捉え方の違い。
- ・ 詳細に、しかし過不足なくご説明して頂いた印象を抱きました。とても勉強になりました。有難うございました。
- ・ 学生の受講する1週間あたりの科目数を減らすこと。
- ・ 大学の授業というものは、単なる知識の共有や伝授ではなく、身体感覚をもって行われるものだということご主張にとても賛同します。
- ・ VRが発達したとしても、あくまで仮想であることには変わりなく、むしろ現実と仮想空間がリアリティを持って進化していくほど、仮想空間の身体性は失われていくように感じました。【ダブルメジャーやリカレントについて】本学は医学部を持っていますが、医学部というのは他学部と比べてかなりユニークだと思います。一度大学で看護や薬学といった医療だけでなく、理学部を卒業したのちに修士課程を修了したのちに再入学する学生もおり、多様性に富んでいるように思います。また、そのためか、学修に意欲的な学生が多く、医療×ITをテーマとしてプログラミングサークルを設立するなど、同好会としてのレベルもかなり高いものがあります。医学部は難易度が高い分、留年や再入学への心理的ハードルが他学部と比べて低く、創造性が生まれているように感じました(YouTubeでも活躍されている東大の河野玄斗さんは医師国家試験と司法試験の両方に受かって資格をお持ちなことからもそのように思います)。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・ 水平統合の将来像への課題などでしょうか。
- ・ 学習者と教員のコミュニティ形成について、更なる情報提供を希望いたします。
- ・ 私の通信環境の問題ですが、質疑応答の内容がほぼ聞き取れず、背景情報がほぼないので恥ずかしかったです。
- ・ コミュニティという空間論と、講演内容にあった時間論との交差点について、自分の中ではまだ腑に落ちていないところがあります。空間と時間の共有ができれば良いと思いますが、パンデミック下で空間の共有ができない場合、時間の共有をどう維持していくか、また、その維持戦略と現代社会がかかえる大学教員の多忙化との折り合いをどうつけるか、この辺が現場感覚としては議論を深めたいところだと思います。
- ・ 吉見俊哉先生の大学論に関する書籍は何冊か拝読しており、それと照らし合わせながら拝聴したので、理解が深まりました。
- ・ 適当な科目数を減らすためにクォーター制を導入した場合、セメスター制の2科目を2つのクォーターに分けることによって、半分の先生に「授業はいらない」と言わなくてもよいのではないかと、半分の先生に「授業はいらない」と言わなくてもいけないかわかりませんでした。1科目当たりの単位数を増やして、卒業単位における科目数を減らす場合でも、必修科目から選択科目に変更することで、教員には「授業はいらない」とはならず、かつ、受講生に「お互いを感じられる」適正人数にすることで、評価採点などの授業における負担の軽減にもなり、教員にとってもメリットではないかと思えます。「俺の授業は全ての学生が聴く必要がある大事なものだ」という教員にはデメリットと感じられるかもしれませんが。
- ・ 前もって登壇者の著書を読んでいることで理解できるような内容が含まれていたとは思いますが、個人的にはそれだけ深い内容であった

とも思うので、大変満足している。

- ・わかりにくいところはありませんでした、個人的にはもっと先生の文理複眼のお話を伺いたかったです。
- ・「授業・単位」の実質化について、「学びの転換」で、新入学生が対応できるよう、説明会？授業の取り方をもっと教えないとダメなのかなと思った(自分だったら、詰め込み授業に時間割を設定してしまおう)。
- ・教育評価の時間がトップダウン的に増加していることへの対応策。
- ・たとえば、高等専門学校でも、人間、社会、自然とはどのようなもので、われわれはどう生きていかなければならないかを考えるためのリベラルアーツ教育は絶対必要です。ただ、聞きっぱなしの講義を聴くだけではなくて、自分で多くを読み討論を戦わすことによって、自分がどう社会に寄与したいかを深く考え、方向性を決めることができる思慮深い多くの人材を生むことが必要だと思います。この仕事は大学だけの専売特許ではないように思います。

4. セミナーについての意見・感想

- ・どういう人たちが受講しているのか、できれば知りたい。個人名なしの属性だけでも。
- ・大変示唆に富み有意義なお話を興味深く伺うことができました。
- ・ありがとうございました。
- ・高等教育に関するさまざまなテーマに関心があります。期待しております。
- ・情熱的な講演でした。
- ・大学のみならず、大学教員の本質を問われる有益なシンポジウムに深謝申し上げます。
- ・資料についても可能であれば事前にいただけると出力して書き込みながら参加できるのでありがたいと思いました。
- ・私学の大学と高校を設置する法人の事務職員です。現在は附属高等学校にて勤務しております。第三世代大学へ三回入学できる環境を生きている間に実現できるきっかけ作りができれば本望です。
- ・とても充実した時間になりました。ありがとうございました。
- ・講演だけでなく、質疑応答が大変、貴重で示唆に富むものとなっていて、非常に良かったので、質問が限られていることは残念でありました。
- ・素晴らしい登壇者、企画であったと思います。これからも期待しております。
- ・大変興味深かつ具体的なお話で、とても勉強になりました。大学ファンド等大学を取り巻く環境は加速度的に変化しています。これからの大学を考えるために、またこのようなプログラムを継続して開催いただきたいと思います。
- ・ぜひ動画配信の閲覧を。
- ・課題図書のようなものが示されるも、パワポ資料は終了後に提供されるスタイルに不安を感じたが、聞くことに、いつも以上に集中ができる。集中するしかないというスタイルも、いいものと思いました。
- ・今回のようにタイムリーなテーマを取り上げていただけるとよいかと思います。
- ・たいへん面白く受講いたしました。
- ・今後も今回のようなセミナーをどんどん開催していただければ幸いです。
- ・とても新鮮さを感じるご講演でした。有難うございました。
- ・講義資料は、講義開始と同時に配布してほしい。
- ・ベストな講師選択であったと思います。

マネジメント力形成関連 コード:M(Management)

2021年
7月31日(土)
14:00-16:00

2021年度SDPシリーズ(第1回) 大学等の連携・統合

講師 羽田 貴史(広島大学・東北大学 名誉教授)

回収率 = 61.2% (74/121)

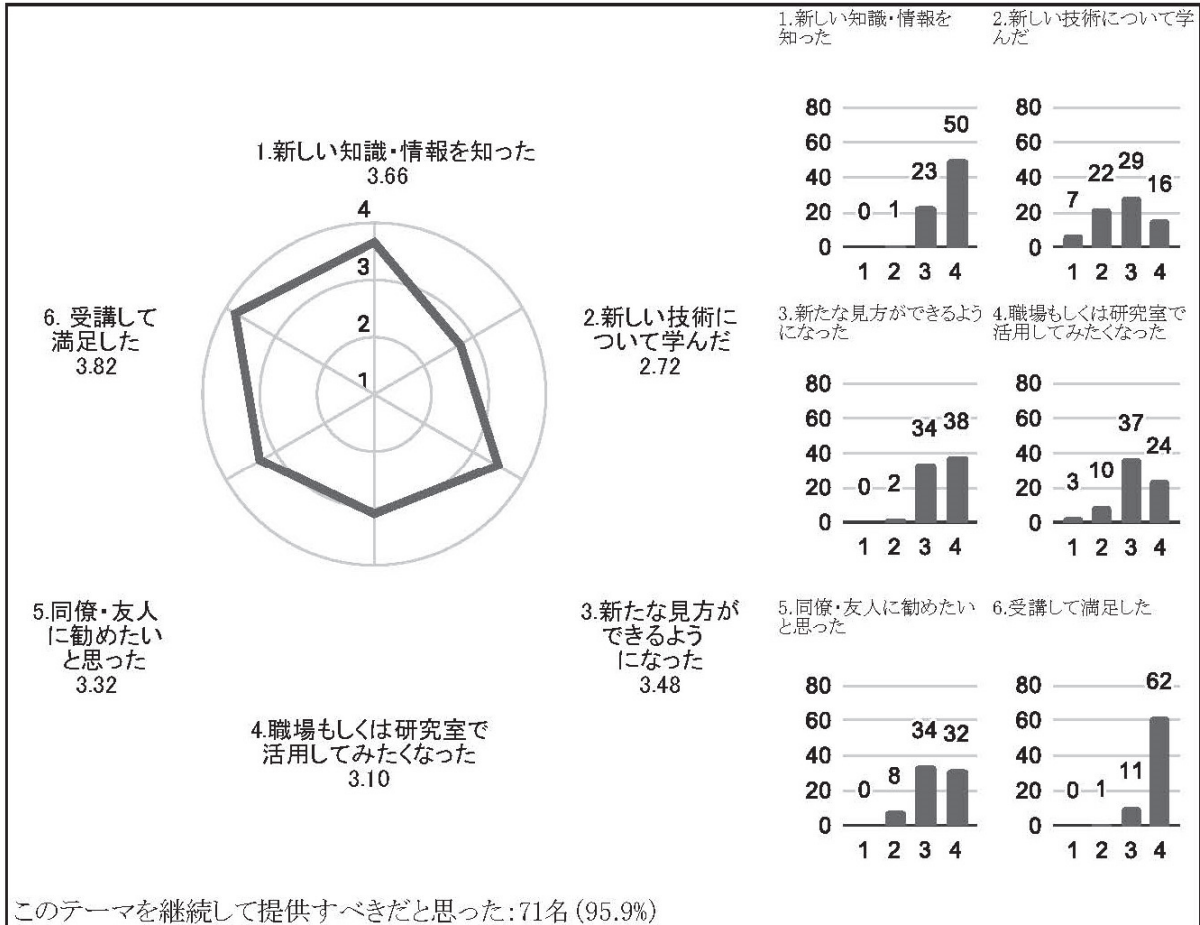
回答者属性(N=74)

【職階】教授(12)/准教授(5)/講師(5)/助教・助手(2)/管理職教員<学長~学部長>(0)/博士課程(1)/職員<部長・課長以上>(19)/職員<係長・主任・一般職員等>(19)/その他(11)/無回答(0)

【性別】女性(20)/男性(51)/無回答(3)

【学内外】東北大学(5)/他大学等(69)/無回答(0)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・ 現在勤務している釧路公立大学は、法人化されていない数少ない大学であるが、2023年4月から法人化を予定している。法人化後、他の高等教育機関との関係がどのようになるか興味深いところである。
- ・ 連携・統合について、その違いがよくわかりました。できれば再度録画で確認したいと思います。
- ・ 大学の統合の種別、意義についての区分がわかりやすかったです。
- ・ 私立大学同士の連携・統合のヒントを頂いた。
- ・ 大学間連携への示唆。
- ・ 今日のお話の「相補的統合の相乗効果」、特に「範囲の経済」が大変にヒントになりました。現在の日本の人口と経済の状況下で、連携・統合は、大学だけでなく、博物館でも考えないといけない、というコメントです。ありがとうございました。
- ・ 大学等連携法人に関する動向や地方創生の一連の流れについて、詳細な資料で解説いただいたことで大学連携の課題を把握することができました。
- ・ 定員の充足だけで考えない、統合の可能性についてのお話が興味深かったです。
- ・ 連携に関する情報の整理ができた。
- ・ 個別大学が定員充足していればよい、を超えた公益性こそが連携・統合により目指されるべきであるというご指摘が印象に残りました。
- ・ 統合に関する裏事情を聞き、実質的な問題がわかった。
- ・ 連携について知識が乏しかったので補完できた。特に政策文書については重要と思った。
- ・ 経営統合の場合には、経営企画トップで判断しても、結局教職員の理解・賛同がないとなかなか進まないことがわかった(静岡大と浜松医科大学の例)。

- ・提携と統合までのグラデーション。
- ・連携開設科目について役立つと感じました。
- ・理念、方針を明確に打ち出し、それを啓蒙、改良し続け、基準化、標準化、平準化できる階層、エリア、教科のところから統合、分散をして運営していく。
- ・全体的な動向、取材などされた結果の状況。
- ・先生が引用された資料一つ一つが貴重でした。こうした資料に基づいて、今後の戦略を考えたいと思いました。
- ・大学等連携に関する過去の政策や事実の整理。担い手問題などの現実的なネックなどが大変勉強になりました。
- ・内容そのものではありませんが、受講して「国公立と私学との連携・統合も、やり次第では可能では」と考えられたこと。ただし、私学の場合、(建学の精神や3Pはともかく)ある程度は学問のトレンド(多くの人が学びたいと思っている領域)を意識せざるを得ず、そこが大学の「強み」としている領域と合致しているかどうかは鍵だ、とも思いました。
- ・長野と京都を除く都道府県には高等教育機関を見立てる力がない。これは的を射ているお話しでした。県に高等教育政策を立案できる人材や部門があると統合・合併は別としても中等教育と大学との連携や教育の相乗効果は高まるはずだと考えています。一国立大学が高大接続を推進しても限界を感じている中でいろんなヒントを頂けたように思います。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・国公立大学の法人化前と法人化後でどのように変わったのか？連携がしやすくなったのか興味を持った。
- ・全体的にわかり易かったです。
- ・全て明快！痛快！
- ・国立大学もさることながら、特に地方私立大学では18歳人口の減少からサバイバル状態になっているところが少なくありません。私立大学同士の統合のみならず、国公立の垣根を超えた統合連携の動きも必要かと考えます。
- ・クロスアポイントメントは産学連携の枠で活用すべきとのことでしたが、複数大学でクロスアポイントメントで雇用されている教員の方がいらっしゃるように思います。これはあまり好ましくない例ということでしょうか？どんなデメリットがあるのでしょうか？
- ・地方国立大学が私立大学に、資源をまわすというインセンティブは働かない？私立大学のカトリックとプロテスタント間や、仏教の宗派を超えた統合はかなりハードルが高い？
- ・大学コンソーシアムやCOCは国公立大学にとってはいいかもしれませんが。そのようなつながりをもとにWin-Winの関係が大学レベルで、となると画餅かなと。
- ・大変分かりやすかったです。
- ・3つのポリシーについては、同意する部分とそうでない部分がありました(笑)。とはいえ羽田先生の主張は正論であろうと思います。

4. セミナーに関しての意見・感想

- ・とても勉強になりました。ありがとうございました。
- ・海外、とくにフランスにおける大学統合についてのお話も聞いてみたかったです。
- ・参加者がわかると、なお良い。
- ・今回のセミナーで他大学との連携等について様々な示唆をいただきました。ありがとうございました。
- ・羽田先生の幅広く深い研究成果を拝聴する機会をご提供いただきありがとうございました。
- ・羽田先生、いつもながらの切れ味よく本質をついたご講演、質疑回答、ありがとうございました。
- ・羽田先生のおっしゃっていた「作文」を信用してはいけないというお話は、私も同意します。本学執行部に理解していただきたいです。
- ・スクラップアンドビルドを学科単位で行うような考えもあると聞いたことがあります。統合の結果不自由さが現場で生まれて、動きやすい単位で変化が発生する可能性も、今後あるのではないかと考えています。
- ・詳細な資料があり、よく理解できました。ありがとうございました。
- ・大学の連携・統合は重要課題と考えるので、今後もこのテーマを継続していただきたい。
- ・3つのポリシーに関するお考えに、心から同意します！
- ・羽田先生の率直なご意見などもWebなのにlive感を持って伺えて、大変有益な場でした。
- ・質疑応答も大変勉強になりました。貴重な機会を誠にありがとうございます。
- ・福島県の高校教員からは、県立医大、会津大と本学が一緒になればもっと大学としての機能がスケールアップするのではないかとのお話を伺うことがあります。本学にもいらしたことのある羽田先生はどうお考えになっているんだろうと思って伺っていました。今日のお話を伺って統合は現実的ではないと感じていますが、連携のあり方でご助言が頂ければと思います。

4.4 PDPonline (専門性開発プログラム動画配信サイト)一覧

(2021 年度末時点)

	セミナー名	講師(所属は講演当時、敬称略)
1	Managing internationalisation: The priorities of the University of Melbourne	Richard James(メルボルン大学)
2	Finding Common Ground: enhancing interaction between domestic and international students	Sophie Arkoudis(メルボルン大学)
3	研究と実践のインタラクション:大規模学生調査研究と大学IRコンソーシアム	山田礼子(同志社大学)
4	学術分野の男女共同参画とポジティブ・アクションの課題—憲法学者としての歩みにふれて	辻村みよ子(東北大学)
5	Designing Your Courses for More Significant Learning	Dee Fink(高等教育コンサルタント)
6	大学教育論:教養と専門の二項対立を越えて	小笠原正明(北海道大学)
7	リーダーシップと意思決定	吉武博通(筑波大学)
8	歴史から見た大学:中世から現代まで	寺崎昌男(立教学院)
9	認知科学と学習の原理・応用	佐伯胖(信濃教育会教育研究所、東京大学名誉教授)
10	Ensuring Research Integrity in the Australian Context: Future Directions	Marc Fellman(豪ノートルダム大学)
11	データに基づく教学改革をどのように進めるか ~アセスメントの5ステップ~	山田剛史(愛媛大学)
12	大学教育と青年期発達	鈴木敏明(東北大学)
13	授業づくり:準備と運営	邑本俊亮(東北大学)
14	アカデミック・ライティングを指導する—現状の分析と指導法の提案—	井下千以子(桜美林大学)
15	東北大学生の履修行動と学修成果	串本剛(東北大学)
16	学修成果測定をめぐる国際動向	杉本和弘(東北大学)
17	人文・社会科学における研究キャリア形成—現状と若干の提言	佐藤裕(国際教養大学)
18	学習と教育の科学—認知理論から大学の授業改革を考える—	市川伸一(東京大学)
19	Ethical Conduct in Research Supervision – Principles, Policies, and Procedures	Gabriele Lakowski(メルボルン大学)
20	学習効果を高める ICT の活用法 ~反転授業も含めた授業設計~	向後千春(早稲田大学)
21	デジタル知識革命と大学の未来 ~ポスト・グーテンベルク時代の教育に向けて~	吉見俊哉(東京大学)
22	発達障害学生支援の現状と法が求める合理的配慮	青野透(金沢大学)
23	Transforming Classrooms for Active and Collaborative Learning	Andy Leger(クイーンズ大学)
24	学生が成長する環境とは何か —ボーダーフリー大学の現実をふまえて—	葛城浩一(香川大学)
25	学力形成と教育マネジメントの役割—金沢工業大学の実践—	西村秀雄(金沢工業大学)
26	大学教育改革のトレンドと日本が目指すべき 21 世紀の学士課程教育像	小笠原正明(北海道大学名誉教授)
27	体育を通して見る人間教育	木原成一郎(広島大学)、小林勝法(文教大学)、大築立志(東京大学)、浅井英典(愛媛大学)
28	大学教員の役割とキャリアステージ	羽田貴史(東北大学)
29	社会学における数理科学教育の現状と課題	盛山和夫(関西学院大学)
30	大学における統計科学・データサイエンス教育の課題と展望	渡辺美智子(慶應義塾大学)
31	外国人留学生の日本における就職支援の課題と企業の取り組み事例	田籠喜三(株式会社 TAGS)

32	Academic Leadership and Current Challenges in Higher Education: an Australian Perspective	Peter McPhee(メルボルン大学)
33	Leadership Foundation for Higher Education(UK)	Doug Parkin (Leadership Foundation for Higher Education)
34	Curriculum Reform in Australian Universities: Management for Internationalization	Peter McPhee(メルボルン大学)
35	Classroom English: Pronunciation	Vincent Scura(東北大学)
36	データを活用した教育改善へのステップ	鳥居朋子、川那部隆司(立命館大学)
37	私立大学のガバナンスの課題と展望 —地方中・小私学の可能性を考える	合田隆史(尚絅学院大学)
38	国立大学のガバナンスとリーダーシップ	吉武博通(筑波大学)
39	大学職員の専門性開発 —その現状と課題—	大場淳(広島大学)
40	大学カリキュラムの構造と編成原理	吉田文(早稲田大学)
41	発表倫理を考える	山崎茂明(愛知淑徳大学)
42	研究評価の手法とマネジメント	林隆之(大学改革支援・学位授与機構)
43	インストラクショナルデザインへの誘い	鈴木克明(熊本大学)
44	コーチング技能を活用した院生指導	出江紳一(東北大学)
45	グローバル化する高等教育における国際化戦略・政策・実践	太田浩(一橋大学)
46	国民の数量的リテラシーに求められるもの —科学技術立国を支える基盤	桑原輝隆(政策研究大学院大学)
47	イノベーション人材育成に資する数学教員養成の在り方	根上生也(横浜国立大学)
48	聴覚・視覚障害学生の体育授業における配慮と工夫	栗原浩一(筑波技術大学)
49	障害学生の発達の課題と支援のあり方	石原保志(筑波技術大学)
50	発達障害を含む精神障害のある学生への合理的配慮と相談支援のあり方について	長友周悟(東北大学)
51	聴覚障害学生の語学授業の配慮と課題	須藤正彦(筑波技術大学)
52	聴覚・視覚障害学生のイコールアクセスの理念に基づく授業環境の整備	石原保志、宮城愛美、宇都野康子 (筑波技術大学)
53	授業デザインとシラバス作成	串本剛(東北大学)
54	「しまった !!」とならないために —ICT時代の教育で押さえておきたい法—	三石大、金谷吉成(東北大学)
55	Engaging Students in Learning in English-medium Classes	Todd Enslin(東北大学)
56	Leadership to Internationalize Higher Education and its Institutions	John K. Hudzik(Michigan State University)
57	大学生のクリティカルシンキングの育成	楠見孝(京都大学)
58	学生理解と学生発達	岡田有司(東北大学)
59	課題を考える—大学教育の課題とデータサイエンス学部の挑戦	竹村彰通(滋賀大学)
60	[SDP シリーズ第 1 回]経営支援に向けた IR 情報のマネジメント	森雅生(東京工業大学)
61	[SDP シリーズ第 1 回]内部質保証を学習成果につなげる道標	大森不二雄(東北大学)
62	[SDP シリーズ第 1 回]教学ガバナンスのあり方とそれを支えるアカデミック・リーダーの育成	杉本和弘(東北大学)
63	私立大学のガバナンス ~事例にみるその多様性と可能性~	大森昭生(共愛学園前橋国際大学)
64	科学教育を科学的に変革する:学生が学習する授業は人気教授の名講義に勝る	Steven Pollock(University of Colorado Boulder)

65	実践から語る－大学数学教育の現状と未来へのデザイン	水町龍一(湘南工科大学)
66	[SDP シリーズ第 2 回]リスクマネジメントとしての研究倫理の取り組み	羽田貴史(東北大学)
67	[SDP シリーズ第 2 回]現代社会における科学技術イノベーション政策の動向と課題	小林信一(放送大学)
68	組織のパフォーマンスを向上させるマネジメント	藤本雅彦(東北大学)
69	研究政策と知的財産戦略－大学における研究成果の取扱い－	玉井克哉(東京大学)
70	IR による教学データの活用手法	浅野茂(山形大学)
71	ラーニング・アナリティクスの可能性	緒方広明(京都大学)
72	大学における教育と学習の評価	木村拓也(九州大学)
73	発達障害学生の学びとキャリア「入口」「真ん中」「出口」の支援	田澤実(法政大学)
74	世界における高等教育の質保証の到達点と課題	深堀聡子(国立教育政策研究所)
75	[SDP シリーズ③2018]第 3 期認証評価にどう対応するか－内部質保証の重点項目化の意味－	土屋俊(大学改革支援・学位授与機構)、工藤潤(大学基準協会)、伊藤敏弘(日本高等教育評価機構)
76	国際シンポジウム「ノーベル賞受賞者が主導した科学・技術教育の科学的変革－カーン・ワイマン博士とインペリアル・カレッジ・ロンドンの取組－」	Carl Wieman (Stanford University)
77	国際シンポジウム「ノーベル賞受賞者が主導した科学・技術教育の科学的変革－カーン・ワイマン博士とインペリアル・カレッジ・ロンドンの取組－」	Martyn Kingsbury (Imperial College London)
78	学びのユニバーサルデザイン(UDL)で幅広い教育ニーズに対応できる講義を	川俣智路(北海道教育大学)
79	エンrollment・マネジメントをどのように捉え、どのように進めるか	髙田敏行(茨城大学)
80	国立大学における経営者層形成の諸問題	山本健慈(国立大学協会、和歌山大学 名誉教授)
81	大学の使命と社会～私のビジョン～	宮内孝久(神田外語大学)
82	大学の使命と社会～私のビジョン～政策の視点、地方私学の視点から	合田隆史(尚絅学院大学)
83	世界の高等教育政策	杉本和弘(東北大学)
84	高大接続と大学入試改革	宮本友弘(東北大学)
85	大学は誰に何を説明するのか－共通性と多様性の両立	深堀聡子(九州大学)
86	学修時間と単位制度を再検討する：日米の議論から	森利枝 (大学改革支援・学位授与機構)
87	リカレント教育の今、そしてコロナ後に果たすべき大学の役割	乾喜一郎(白百合女子大学)
88	ポストコロナ時代と「大学」の〈時間〉	吉見俊哉(東京大学)
89	学生への経済的支援の現状と課題	小林雅之(桜美林大学)
90	日本の科学研究力失速の現状とその要因	豊田長康(鈴鹿医療科学大学、三重大学 名誉教授)

4.5 プログラム修了者数(2010～2021年度)

年度	PFFP ¹⁾		NFP ²⁾		TLP ³⁾ ※1	
	フルコース	ショートコース	フルコース	ショートコース	教員	職員
2010	13	-	-	-	-	-
2011	15	-	3	-	11	0
2012	6	-	6	-	4	3
2013	9	-	2	-	4	4
2014	5	-	3	-		
2015	4	4	6	6	7	2
2016	3	4	3	18		
2017	7	-	14	-	3	4
2018	3	-	18	-		
2019	3	-	14	-	0	4
2020	未実施		未実施			
2021	35※2		未実施			
総計	111		93		46	

1)大学教員準備プログラム(Preparing Future Faculty Program: PFFP)

2)新任教員プログラム(New Faculty Program: NFP)

3)大学変革リーダー育成プログラム(Transformational Leadership Program in Higher Education: TLP)

※1

2011・2012年度は、各1年間のパイロット版プログラム(大学教育マネジメント人材育成プログラム(Educational Management Leadership Program: EMLP))、2013年度より2か年の履修証明プログラム化、2013～2015年度はEMLP、2016～2018年度より「アカデミック・リーダー育成プログラム(LAD)」に改編、2019～2020年度はTLPとして提供、またTLP2019-2020年度受講生は、新型コロナウイルス感染症に伴いTLP2019-2021として長期履修で実施。

※2

2021年度プログラムは従来のプログラムと期間、内容等を大幅に変更して2回実施した。

4.6 高等教育レポート

第1回(2021年9月24日)

コロナ禍における中国の高等教育と大学生への経済支援(王帥 東京大学准教授)

コロナ禍における台湾政府の対策と大学生への経済支援(黄文哲 三重大学講師)

第2回(2022年3月24日)

中国における学生への経済支援の変遷(王帥 東京大学准教授)

コロナ禍での台湾の大学事情(黄文哲 三重大学講師)

4.7 産学連携教育イノベーター育成プログラム 受講者・修了者

(1)2020 受講者・修了者数

受講期間:

コース	受講者	修了者
産学連携リベラルアーツ育成コース(LA)東北大学提供	41	35
インストラクショナルデザイン指導力育成コース(ID)熊本大学提供	15	13
計	56	48

内、企業派遣:6社より計7名(LA3名、ID4名)

【参考値】2020年度KPI:受講者50人(2コース分)

(2)2021 受講者・修了者数

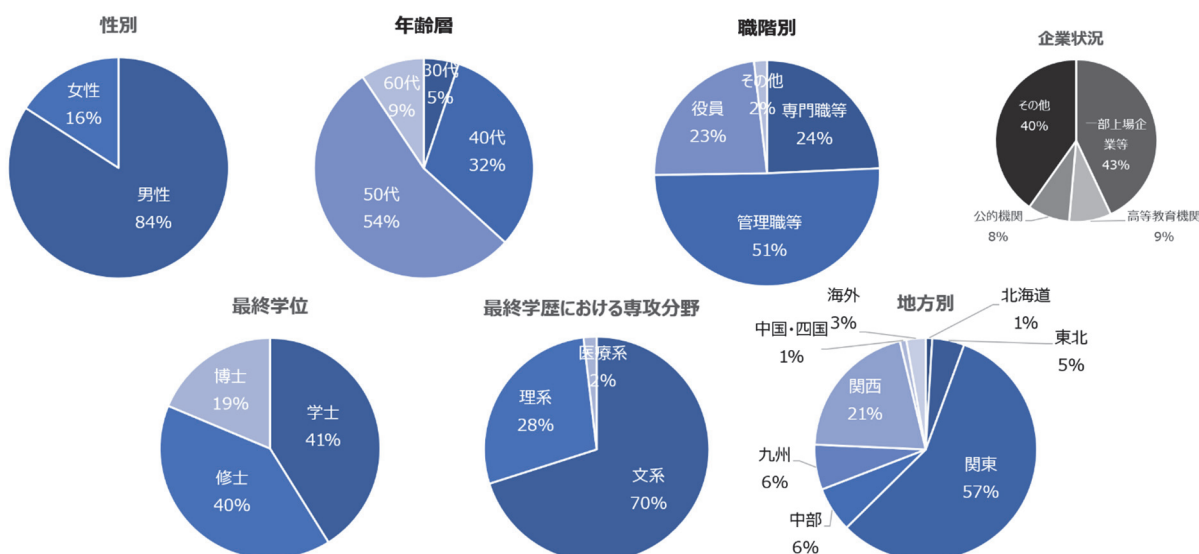
受講期間:

コース	受講者	修了者
産学連携リベラルアーツ育成コース(LA)東北大学提供	30	29
インストラクショナルデザイン指導力育成コース(ID)熊本大学提供	23	21
アントレプレナーシップ教育力育成コース(EP)大阪府立大学提供	27	22
リーダーシップ開発力育成コース(LD)立教大学提供	27	25
計	107	97

内、企業派遣:2社より計2名(LA1名、ID1名)

【参考値】2021年度~KPI:受講者100人(4コース分)

(参考)2021年度 受講者属性(N=107)



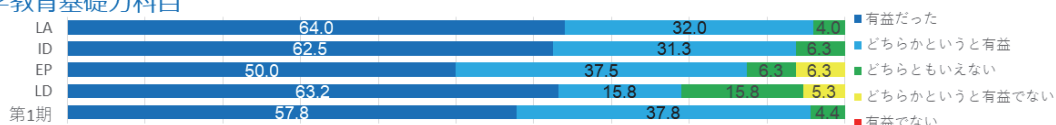
2021年度 産学連携教育イノベーター育成プログラム 受講者アンケート(修了時)

回答者数

コース名	修了者数	回答者数	%
LAコース	29	25	86.2%
IDコース	21	16	76.2%
EPコース	22	16	72.7%
LDコース	25	19	76.0%
合計	97	76	78.4%

①-1「学びと社会をつなぎ学生の大学教育への動機づけを高め、社会人をリカレント教育へ引き付ける教育者を育成する」というプログラムの目的に対して、それぞれの科目はどの程度有益でしたか (N=76)

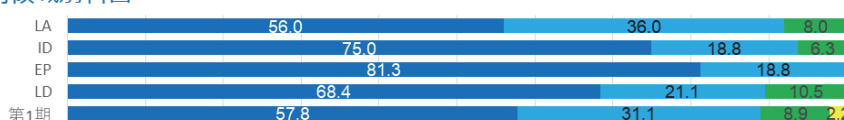
大学教育基礎力科目



汎用的教育実践力科目



専門領域別科目

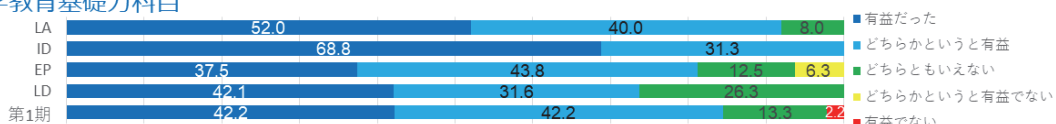


教育イノベーター実践演習科目

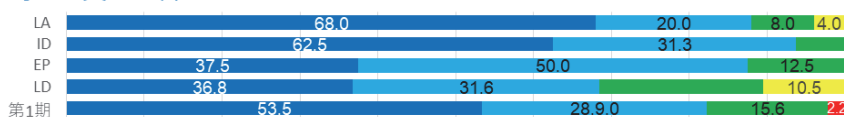


①-2「実務経験に基づいた実践知と、これに関連する理論・方法論など普遍的な学術知とをブリッジし、両者の対話・循環による相乗効果を目指す先導者を育成する」というプログラムの目的に対して、それぞれの科目はどの程度有益でしたか (N=76)

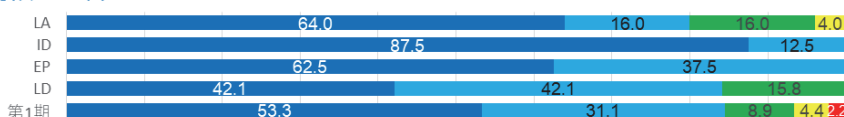
大学教育基礎力科目



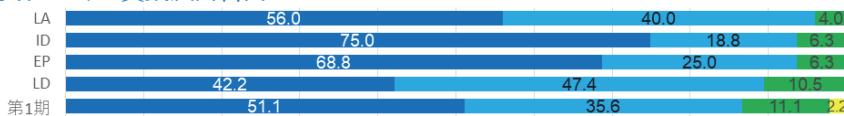
汎用的教育実践力科目



専門領域別科目

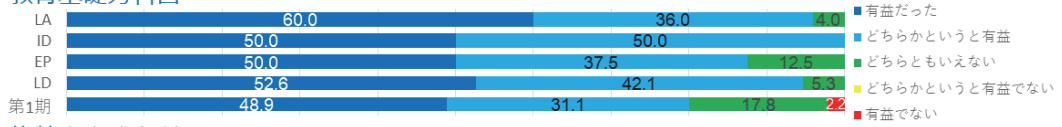


教育イノベーター実践演習科目



①-3「学生・受講者が学ぶことに焦点を置いて学習活動を効果的に促進し、学修成果の獲得・向上を実現する教育をデザインし実践できる変革者を育成する」というプログラムの目的に対して、それぞれの科目はどの程度有益でしたか (N=76)

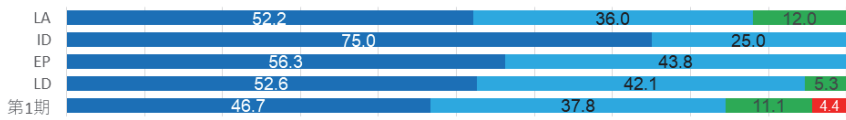
大学教育基礎力科目



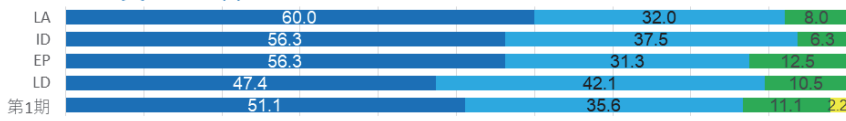
汎用的教育実践力科目



専門領域別科目



教育イノベーター実践演習科目



教育関係共同利用拠点(教職員の組織的な研修等の共同利用拠点)

大学教育イノベーション人材開発拠点 事業報告書 2021

Joint Educational Development Center

Innovation in Learning and Teaching at University Annual Report 2021

2022年7月発行

編者 東北大学高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター

発行所 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

TEL (022)-795-4471 Email: cpd_office@grp.tohoku.ac.jp

印刷所 北日本印刷株式会社

〒984-0064 仙台市若林区石垣町 35 番 6

